改正

中等學校受驗講習會編纂

中學校
高等女學校
實業學校
幼稚學校

入學受驗者準備書

附問題解答

265
404

東京
大阪
一書堂發行

特26
45

中等學校受驗講習會編纂

中學校
實業學校
高等女學校
地方幼年學校

入學受驗者準備書

問題解答

明治
43.10.14
内交

大阪
東京
一書堂發行

緒言

本書は、中學校、高等女學校及び中等程度實業學校の入學志願者に供すべき受驗準備書にして、曩さに一度發兌して大に江湖の賞賛を博したるものなりしが、今回小學校教科書改正と共に、本書亦之が改正を企て、精密の注意と用意とを加へ編纂を終り、更に最新準備書として江湖に發賣し、大方の賞賛に酬ひんとするものなり。

故に、前回以來も尚絶えず各地の中學校、高等女學校、實業學校の入學試驗問題蒐集に怠ることなく、以て更に是等を按排配列し、益々本會が實地研鑽の手腕を發揮し、萬遺憾なきまでに秩序正しく記述せるものなり。

されば應用力の養成と、既修事項の練習両つながら最も完全を極め、獨り準備的の獨修のみならず、準備的の指導を爲すにも缺くべからざるものならん。

内容は試驗科目たる國語と算術の二科目につき專ら既修事項の練習材料と兼ねて入學受驗者の爲め諸種の心得を卷頭に附記したり。

かるが故に、入學志願者の爲め、最も適切なる好箇の參考書たるは勿論、準備的示敎用として必要缺ぐべからざらしめたれば、獨習者は、各章につき漏れなく繙讀したる上。從來學習したる事項と對照して反覆練習し、指導者は、また之に依りて敎科書と對照の上、勉めて叮嚀懇切に志願者の頭腦を練るが如き何れも充分咀嚼すべき方法を必要とす。

要するに、本書を巧みに利用するの途を講じ、最後の勝を占められん事を切望するは、豈編者のみに非るべし。

明治四十三年九月改正書成ると共に

編者識す

入學受驗者の心得

凡そ如何なる學校に入學するとも、先づ『健全なる精神は健康の身體に宿る』といふことを忘れてはならぬ。然れば、志願の決心を起すに先つては、第一に身體の健康を保つ事に留意し、その上にて充分學力の素養に勉め以て自信力を養成し、決して人を依賴するなどのことなきを期し、己に克つ事を念じて、正々堂々の陣を張り、最後の勝利を得る方法を考へねばならぬ。唯一時の僥倖を賴み、若しくは、運を天に任すなどその場を瞞着するを、チョットでも、思ふてはならぬ。

何をいふにも、全國の中等諸學校へ入學しやうと思ふものは、常に募集定員の五倍も六倍もあつて、志願者悉くが入學することは出來ぬ。從て、これ等志願者と互に競爭して、全く勝利を得やうとするには、並大抵の準備では不可ないのである。即ち身體を攝養して

十二分の健康に堪へ得るやう心掛けなば、勢ひ學科を學習しても面白く快活に覺ゆる事ができるから、從つて素養も充分になり、自信力も愷かとなり、卑怯の心が起らぬやうになる。これに反して、身體の攝養を怠りて健康を顧みないと、自然身體羸弱となり、何學科を學んでも不快の念のみ積り、遂には學習が嫌になつたる結果、素養が足りない所から、人を恃む念を生じ、愈試驗となつたる曉は、知らず識らず卑劣の根性が起つて、失敗に終るものである。よし、萬一の僥倖を得て、入學したるとも入學後、滿足に修學を仕遂ぐることこと困難で、中途にして退學せざるを得ざる有樣に立ち至るものだ。又、如何に身體健康なりとて勉強することを怠れば、少しの效力ないこと、恰も身體羸弱なると同じ運命に遭遇せねばならぬ。故に、健康に次ぐに勉學復習を最も必要だといふことは、常に忘れてはならぬ。而して、この學習も平生から心掛けて、次第々々に進ましむる方法を講ぜぬと不可ない。然るを世には、試驗間際まで打ち捨てゝ顧みず、愈期日が迫ると俄かに思ひ出したかの如く、あわてゝ勉强にかゝり、夜となく晝となく睡眠をも廢して、非常に復習する者がある、斯くては、唯々身體を疲勞せしむるのみで、良好の成績を得ることこと難く、却て肝腎の當日に至つて、精神呆然となり思はぬ不覺を招くことが多いから、斷じて試驗學問とか俄勉强とかは避ける樣吳々も留意するがよい。幸ひにして、何の故障なく合格したりとて、いざ入學の後に至り、一時の安心が結局禍となり、素養ある者には打ち勝たれず、何時かは化の皮を現すのみならず、最後迄試驗度毎に苦心する階梯となるから、よく〳〵注意するがよい。

故に、入學志願者が競爭に打ち勝ち、その入學の目的を達せやうとならば、これ等に對し夫々用意がなくてはならぬ。この用意こそ

先づ入學試驗に應ずる丈けの試驗科目を十分學習して置かなければならん。偖て學科目の重なるは、國語と算術であるから、この二科目は尋常科で習つたことから高等科に於て修めたことを、反覆復習して、讀方も講釋も綴方も計算も、十分記臆が出來る樣にせねばならぬ。本書は則ちその記臆を丁寧復習の便に供せん爲めに外ならぬもので、各科練習上の注意要項を述べて置かう。

一、國語科は讀書力を養成し、文章を熟達せしむる爲めの目的であつて、更にこれを講讀、書取、綴方、書方の四科に分つてある。

二、講讀は第一發音を明瞭にし、解釋は正確に文字の意義と全文の大意を能く表はすことにつとめ、かの方言訛言の如きは、つとめて避くることに注意せねばならぬ。又、これをその儘筆にて解答することを練習し置かねばならぬ。

三、書取は、文字を正確に記し、一點一畫も誤らざる樣、特に類字（瓜と爪、釘と針の如し）に注意せねばならぬ。されば本書は類字及び假名を漢字に改め、又は、漢字の讀方に就き、悉くその上欄に示し置きし故、練習の際には、篤と參照するがよい。

四、綴方は、常に讀本その他の書物で讀むた事を覺ねて置き題に應じて、先づ大体に於ける記述の順序を胸の内で定め、然る後、筆を執つてスラ〳〵と記述し、終つてからも再三再四讀んで見たる上、その文の缺點を見出して幾度も改作する樣にせば、自然文章の上達することは疑ひを容れぬ所である。

五、書方は、本書に示さゞれども、平生注意して嚴正に書く癖をつけて置かねばならぬ。

六、算術科は、數字を明瞭に書き、計算を敏速にし、諳算に習熟す

る等のことが第一の要件である。故に、本書は、練習問題を多くして懇切なる解式を加へ、尚、その上欄に於て、夫々注意事項を記述して、十分練習に意を用ゐたれば、何れも參照するがよい。

七、尚、算術科は、常に應用力を養成することにつとめ、同時に、日常の計算に就き、見たる事聞きし事は周到の注意を拂ひ、大凡その標準を知り置く必要がある、斯くせば、問題の答を出す前に於て、概算することが出來るのである。例へば米一升の價を出す時に於て、常に注意して居れば、其の大凡そ甘錢前後のものであるといふ事が分るから、大間違ひの位ひ取りをする樣な事がない。又、一度計算したりとも、誤りがない事とも限らぬから、再三、檢算を行ふ習慣を作らねばならぬ。

八、尚、解式の書方を粗末にする結果、往々飛んでもない間違ひを來す虞があるから、よく〳〵注意が肝要である。例へば等號即ち(=)に就き、簡略に用ふる所から、下の如き間違ひが起る。

5+4=9+1=10　　5+4=9　　9+1=10　　とすべきを單に

斯くの如くにして、試驗に應ずる準備が出來て仕舞へば、いよ〳〵期日といふ數日前からは、一層身心共に靜平を保ち、悠然として受驗するの覺悟が必要である。さてその當日ともなりぬれば、あわてず、さわがず、試驗場に出頭するのだが、その際に於ける心得事項を左に述べやう。

一、宅を出る時は、受驗必要品たる、白紙、毛筆(大小)、鉛筆、消護謨、硯墨(この外に墨壺を用ひたくば別に携帶したりとて差支なし)、小刀等を忘れぬ樣にして、試驗開始時刻前遲くも三十

分には登校し、指揮者に届け出でたる上、靜かに、控所で待ち居るがよい。

二、いよ〳〵、試驗が始れば、落付き拂つて、問題を熟讀しその意味を考へ、然る後、答案を認むることが必要である、決して急いで周章てるには及ばぬ。

三、問題の意味を能く解釋し十分取り違へざるを見極めた後はゆる〳〵答案を認むると共に、認め終らば、次は、必ず再び讀んで見て、誤りはなきか、脫字はなきかと、調べて見る樣にするがよい。

四、試驗の際には、思つたより早く時間のたつものであるが、さればとて、周章つるにも及ばず、要は、時間を利用して、遲れざる樣、又、早く認め終りたりとて、時間の餘す限りは、十分考へるがよろしい。

五、多くの問題の中には、易いものと、難いものとがあるから、先づ、易い方から書き終り、後、難い問題を篤と考へる樣にしないと、案外の失敗を見る事がある。故に、問題の順序通り、必ずしも、書くに及ばず、唯、その番號を間違はせぬ樣に付けて置けばよろしい。

六、試驗場にては、餘所見をなし、又は、隣人と密談などすることは無論、一旦、就いた席は答案を差し出す迄は離れることは出來んから、豫め、入室の以前に忘れ物のなき樣にせねばならぬ。又、平素の勉强に依て、固く自分を信じ決して、人を依賴するなどの卑劣心は起してならぬ。

七、答案に認むる文字は、極めて丁寧に書き、明瞭正確を保たねばならぬ、當字や曖昧の文字は、斷じて書かぬ事として、假名を用ゐるがよろしい。

八、答案の文章は、なるべく漢字を用ゐることゝし、假名は平假名と片假名を混用してはならぬ。

九、答案用紙には、一枚毎に、その始めの下へ、自分の氏名と番號を書くものだから、必ず忘れてはならぬ。但し番號のみの所と氏名のみの所とあるから、この時は、萬事指圖通りにするがよい。

十、同じ科目の答案用紙が、一枚以上になつたときは、その紙の順番を正し番號をつけ、尙その始めの側に氏名をも書き紙撚で綴て出すがよい。（終）

目次

第一編　國語科

第一章　講讀、書取、綴方……一
第二章　講讀、書取、綴方……一四
第三章　講讀、書取、綴方……二二
第四章　講讀、書取、綴方……三〇
第五章　講讀、書取、綴方……三九
第六章　講讀、書取、綴方……四八
第七章　講讀、書取、綴方……五八
第八章　講讀、書取、綴方……六七
第九章　講讀、書取、綴方……七五
第十章　講讀、書取、綴方……八二
第十一章　講讀、書取、綴方……八九
第十二章　講讀、書取、綴方……九六
第十三章　講讀、書取、綴方……一〇五
第十四章　講讀、書取、綴方……一一三
第十五章　講讀、書取、綴方……一一八
第十六章　講讀、書取、綴方……一二四

第二編　算術科

第一章……一
第二章……四
第三章……七
第四章……一一
第五章……一七
第六章……二〇
第七章……二三
第八章……二五
第九章……二七
第十章……二九
第十一章……三一
第十二章……三三
第十三章……三四
第十四章……三六
第十五章……三八

第十六章……四〇
第十七章……四三
第十八章……四七
第十九章……五〇
第二十章……五四
第二十一章……五九
第二十二章……六二
第二十三章……六四
第二十四章……六六
第二十五章……六七
第二十六章……六九
第二十七章……七五
第二十八章……七九
第二十九章……八二
第三十章……八五
第三十一章……八八
第三十二章……九〇
第三十三章……九二
第三十四章……九四
第三十五章……九六
第三十六章……一〇〇
第三十七章……一〇一
第三十八章……一〇四
第三十九章……一〇六
第四十章……一〇八
第四十一章……一一二
第四十二章……一一四
第四十三章……一一七
第四十四章……一一九
第四十五章……一二三
第四十六章……一二五
第四十七章……一二八
第四十八章……一二九
第四十九章……一三二
第五十章……一三三
第五十一章……一三八

第五十二章……一四一
第五十三章……一四二
第五十四章……一四四

算術科解答

第一章……一四七
第二章……一四七
第三章……一四九
第四章……一五〇
第五章……一五〇
第六章……一五〇
第七章……一五五
第八章……一五六
第九章……一五七
第十章……一五八
第十一章……一五九
第十二章……一六一
第十三章……一六二
第十四章……一六三
第十五章……一六五
第十六章……一六七
第十七章……一六九
第十八章……一七〇
第十九章……一七〇
第二十章……一七〇
第二十一章……一七〇
第二十二章……一七二
第二十三章……一七四
第二十四章……一七五
第二十五章……一七七
第二十六章……一七九
第二十七章……一七九
第二十八章……一八〇
第二十九章……一八一
第三十章……一八一

第三十一章……一八二
第三十二章……一八二
第三十三章……一八二
第三十四章……一八二
第三十五章……一八三
第三十六章……一八三
第三十七章……一八四
第三十八章……一八五
第三十九章……一八七
第四十章……一八八
第四十一章……一八九
第四十二章……一九〇
第四十三章……一九三
第四十四章……一九四
第四十五章……一九七
第四十六章……一九七
第四十七章……一九九
第四十八章……一九九
第四十九章……二〇〇
第五十一章……二〇一
第五十二章……二〇二
第五十三章……二〇三
第五十四章……二〇四

目次終

到至致　倒たおす　併ならび　遊あそぶ　跡あと

中學校
實業學校
高等女學校
地方幼年學校

入學受驗者準備書

中等學校受驗講習會編纂

第一編　國語科

第一章　講讀

第一節

「左の文の讀方及び全文の意義を記せ。但し、附線の字句は特に解釋すべし。

(1)　我が國到るところ名勝の地にことばしからざれども、よく、人工の美と天然の美とを併せたるは日光に如くはなし。されば一年中遊覽者跡を絶たず、夏の盛りの頃、秋の紅葉の折には來り遊ぶもの最も多し。外國人の我國に來る者亦必ずここに遊びて、日光の結構を賞せず

るものなし。

◎答案の書方

(イ) 我が國到るところ名勝の地にとぼしからざれども、よく、人工の美と天然の美とを併せたるは日光に如くはなし。されば一年中遊覽者跡を絶たず、夏の盛りの頃、秋の紅葉の折には來り遊ぶもの最も多し。外國人の我國に來る者亦必ずこゝに遊びて、日光の結搆を賞せざるものなし。

(ロ) 我が國は、何處へ往つても、景色やなどの勝れた土地が少くはありませんが、その中でも、人間がつくした工みの美と天然自然に美しいことが一所になつて、一層美くしいのは日光の外にはありません。そこで、年中いつでも遊覽者の絶え間がありません、特に、夏の盛りの暑い頃とか、秋の紅葉時分には遊び來るものが澤山にあります。それのみではなく、外國の人で我國に來る程の者は、どうでもこゝへ遊びに來て、其の美事なことゝ結搆なことをほめぬものはありません。

舟船 船舶 汽漸 氣

(八) 名勝の地＝各高クテ、スグレタ土地とぼし＝スクナイ
人工の美と天然の美＝人ノ力デデキタ美シサト、自然ノ美シサ
遊覽者跡を絶たず＝遊ビニ來ル者ガ絶エタコトハナイ
結搆を賞せざるものなし＝コノ上モナイト云ツテホメヌ者ガナイ

(2)

交通運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形狀も樣々なり。上古の舟車と今日の汽車、汽船とをくらべんには、誰か人智の進歩の大なるに驚かざらん。

◎答案の書方

(イ) 交通運輸の便を與ふるもの、陸に車、水に船、其の種類も多く、其の形狀も樣々なり。上古の舟車と今日の汽車、汽船とをくらべんには、誰か人智の進歩の大なるに驚かざらん。

(ロ) 交通や運輸の便利を與へてくれるものでは、陸上に車、水上

に船、しかも其の種類は數多くて、其の形ちもさまざまである
おほむかしにあつた舟や車と今日の汽車や汽船と、くらべてみたならば、どんな人でも人の智慧が進んだのに驚かぬ者はあるまい。

(八)　交通運輸＝ユキキ、ハコブ
船＝水ノ上ニウカベテ、ノリアルクモノ
舟＝フネノウチデモ、ヰクチイサイモノ
人智の進歩＝人ノ智慧ガ進ンダコト

思慮　思恩　開閉　問閉

(3)　國を思ふ道に二つはなかりけり、
軍のには立つも立たぬも。

二、次の句を解釋すべし。

(1)　祖宗の大業を承けて、明治の聖世を開かせ給へる御盛運故なきに非ず。

(2)　皇國の興廢此の一戰にあり。

(3)　後世女子の模範とすべき德行なり。

(4)　風景ノ美ヲ以テ名高シ。

(5)　皇室ノ御威德ヲ仰ガザラン。

◎答案の書方

(1)　御先祖の大業を御承ぎになつて、明治の御世を御開きになつた御盛運は、わけのないことではありません。

(2)　みくにが興るのも亡ぶのも此戰である。

(3)　後の世で、女子がてほんとするほどの行ひである。

(4)　景色ガヨイノデ名ガ高イ。

(5)　朝廷ノ御サカンナ德ヲ仰ガヌ者ガアラウカ。

獻　觀　喜　嘉　防　坊

三、次ノ文字ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

健全。　愛敬。　歡喜。　防禦工事。
參列。　年齒。　後悔。　活動敏速。
笑罵。　會得。　漁業。　行在所。

點火。　國境。　拜殿。　協同一致

◎答案の書方

健全＝スコヤカデタツシヤ
愛敬＝アイシウヤマフ
歡喜＝ヨロコブ
防禦工事＝フセグ工事
參列＝ツラナル
年齒＝ヨハイ
後悔＝アトデクヤム
活動敏速＝ハタキガスバヤイ
笑罵＝ワライノノシル
會得＝ナットク
濫業＝スナドルワザ
行在所＝天子樣ノオタビショ
點火＝火ヲツケル

國境＝國ノサカヒ
拜殿＝オガムトコロ
協同一致＝心ヲ協セテ一ショニナル

第二節　書取

一、次ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

シンポハツタツ。　ハイケン。(ミル)
リヨクワン。　セイケツ。
モ、イロ。　テン井ン。
モハン。(テホン)　アウセキ。(アサバン)

◎答案の書方

進歩發達。　拜見。
旅館。　清潔。
桃色。　店員。
摸範。　朝夕。

洲料熟　州科熱

二、左ノ文字ノ讀方ヲ片假名ニテ示セ。

皇祖。醫者。明石。洲本。備中。
小豆島。漁獵。有明海。川内川。洋盃。
洋燈。種類。保護。飲料。猪口。
諳書。熟字。

◎答案の書方

皇祖。醫者。明石。洲本。備中。
小豆島。漁獵。有明海。川内川。洋盃。
洋燈。種類。保護。飲料。猪口。
諳書。熟字。

第三節　綴方

一、左の句の○の所に適當の文字を嵌めよ。

(1) 夏は○く、冬は○し。
(2) 宴○を催す。

(3) 兵法を會○したり。
(4) 白い水煙が○える。
(5) ○さしき少女。

◎答案の書方

(1) 夏は暑く、冬は寒し。
(2) 宴會を催す。
(3) 兵法を會得したり。
(4) 白い水煙が見える。
(5) 優さしき少女。

二、次の文の□所に漢字を、○所に假名を入れよ。

(1) 更に東南に流○て、上野、武藏○國境を□き、渡良瀨川を□せて栗橋に至る。
(2) 箱根と新居とには關所が○○て、役人○一々旅□をしらべて□した。□し其の□□をよけて、わき道を□る

祭礼　築造　婦人　輿

察知　歸宅　輿

様なことを○○ば、關所破といつて、其のものは重い罰を□けた。

◎答案の書方

(1) 更に東南に流れて、上野、武藏の國境を過ぎ、渡良瀨川を合せて栗橋に至る。

(2) 箱根と新居とには關所があつて、役人が一々旅人をしらべて通した。若し其の關所をよけて、わき道を通る樣なことをすれば、關所破といつて、其のものは重い罰を受けた。

三、次の口語を文語に改めよ。

(1) 今日はにぎやかな祭日である。

(2) 聽衆は四方から集つて來て、見る内に人山を築いた。

(3) 小供ほど美しく愛らしいものはありません。

(4) 上流の婦人は四方を閉ぢた輿に乘つて、外から見られないやうにする。

意　竟　第　弟

(5) 或人のアラビヤ旅行日記の一節に次の樣なことが書いてある。

◎答案の書方

(1) 今日はにぎはしき祭日なり。

(2) 聽衆四方より集り來りて、見る内に人山を築きたり。

(3) 小供ほど美しく愛らしきものはなし。

(4) 上流の婦人は四方を閉ぢたる輿に乘りて、外より見るを得ざらしむ。

(5) 或人のアラビヤ旅行日記の一節に、次の如きことあり。

四、左ノ文語ヲ口語ニ改メヨ。

(1) サレド武士ドモハ其ノ意味ヲ知ラザリシカバ、思ヒトガムルコトモナカリキ。

(2) 故ニ、飼養者ノ注意ニヨリテハ、次第ニ其ノ群ノ數ヲ增加スルコトヲ得ベシ。

恐　怒　坐　座

(3) 御多用中恐入候へども御參列成し下され候はば有り難く存じ奉り候。

(4) 百歳の長命を保ちて、一生を坐食に費す者あり。二三十歳の短命にして美名を萬世にとゞむる者あり。

(5) 此の時諸葛孔明といふ人あり。民間に在りて耕作を事とせしが、才名世にかくれなければ、劉備は三度までも其のいほりを訪ひ、遂に迎へて重臣とせり、

◎答案の書方

(1) サレド、武士ドモハ其ノ意味ヲ知ラナカツタカラ、思ヒトガルコトハナカツタ。

(2) 故ニ、飼養者ノ注意ニヨツテハ、次第ニ其ノ群ノ數ヲ增加スルコトガデキル。

(3) 御多用中恐れ入りますが、御參列なし下さらば有難う存じます。

(4) 百歳の長命を保つて、一生を坐食に費す者があり、二三十歳の短命でも其の美名を萬世にとどむる者もある。

(5) 此の時、諸葛孔明といふ人があつた。民間にをつて耕作を事としてをつたが、其の才名、世に高かつたから、劉備は三度までも其のいほりをたづね、遂に迎へて重臣とした。

五、次の文題を綴れ。

(1) 書籍を注文する文（書簡體）

(2) 吾が家（口語體）

◎答案の書方

◎書籍を注文する文

拜啓益々御盛大の事と奉賀候就ひては私事中學校の入學試驗に應じたく目下勉學中に有之候處參考書として必要なる國語字解上下二冊共に生憎當地の書店に品切れと相成居候誠に困却致し候間乍御面倒右二冊小包郵便を以て至急御送り下され度く代金は小爲替劵として

封入致し置き候に付御受取相成度右御注文申上候早々

◎吾が家

吾が家は、この町外れにありまして、昔から古く續いた家柄だと申しますが、今では餘程古くなつて、軒や大屋根の上などには所々に草生ひ茂り、さながら、我もの顔に古き歴史を語つて居る樣で、何となく趣があります。然れども、家は廣く宏壯にして、平生私の書齋と定めて居ります、表坐敷から、外一面に見渡しますと、郊外田圃遠く開け、近く小川の水清らかに、牛馬は、其の間を三々五々さまよひ嚙き、遙かの向ふには町家整然と櫛比して、工場の烟突は其の間に林立しまして斷へず黑烟を吹き出す邊り、汽車の音轟々として笛聲かすかなるなど、眞に畫くことも能はざる眺めであります。私はいつも此の景色に接しては、終日疲れた頭腦を慰さめて居ります。

第二章

第一節　講讀

(1)雲に包まれたる吉野山(2)滿目總て花なり(3)形狀(4)優美高尙(5)鐵道線路(6)百姓(7)上流社會(8)朝鮮(9)兵庫介元忠(10)正寛法師

全金

一、次ノ綴リヲ讀メ。

(1)クモニツツマレタルヨシノヤマ
(2)マンモクスベテハナナリ。
(3)ケイシヤウ(アリサマ)。
(4)イウビカウシヤウ。
(5)テツダウセンロ。
(6)ヒヤクシヤウ。
(7)シヤウリウシヤクワイ。
(8)テウセン。
(9)ヒヤウゴノスケタヾモト。
(10)シヤウクワンハフシ。

二、左の字句の讀方及び解釋を示せ。

全山。　坂路。　別離。　櫻樹。

遷都。　共同生活。　生計。　百花滿開。
親密　不順　敵視。　武器。

三、左の歌の意味を語れ。

あへらじとおもひて思へばあづさ弓
なき數にいる名をぞとゞむる。

◎答案の書方

かへらうとは、かねてから思ふてはゐなかつたから、あづさの弓で、死にに行く人々の名前を、ほりとゞめておかう。

四、次の文の讀方及び全文の意義を示せ。但し、附線の字句は特に解釋すべし。

(1) 昨日、横田君を訪問せしに、横田君は、われを丁寧に待遇して、秘藏の書畫及び彫刻物などを見せたり。

(2) 屋根は茅にてふき、柱は地を深く掘りて立て、床もなく、天井もなき建築なり。

(3) 梅檀ハ二葉ヨリ、カウバシ。トイフ諺ガアル。

(4) 森林は氣候を和げ、土砂の流出を防ぎ、神社、佛閣又は名勝の地に一種の風景を添ふる等、其の効用あげて數ふべからず。

(5) 大和國は久しき間皇都のありし地にして、昔ながらの山河、一木、一草盡く上古を談ぜざるはなし。名所舊蹟をあまねく尋ねんには、幾月の巡遊も尚足らざる感あるべし。

五、次の語の讀方と意味を示せ。

行政。　漁業。　位置。　宮城。
利用。　弑す。　設け。　服從。
習慣。　出家。　勞働。　不屈者。
構造。　保護。　蚯蚓。　討死。

合戰。食器。紡績。健康。

第二節　書取

一、次ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

ブンピ。　セイセイ。　メイシヨ。
サンパイ。　ケウクン。　ヘイキ。
シングウ。　オホミカミ。　ニッポンタフ。
クスノキマサツラ。　バウギヨセン。
ショクブツ。　サッソク。　フナヤク。（ヱキカ）
オンシヤウ。　ハタラク。　ヘウモン。
ハレツ。　スヰジヨウキ。　コウラウ。

二、左の文字の讀方を平假名にて書け。

原料。　涙。　遺言。　茶碗。　漆器。
汽船。　蒸氣船。　馬車。　繁昌。　英斷。

分泌。精製。名所。參拜。敎訓。兵器。神宮。大神。日本刀。楠正行。防。鐵線。植物。早速。不着。恩賞。働く。訪問。破裂。水蒸氣。功勞。

遺道　遺道
汽車、汽船トイフトキニハ汽ヲ用フ

開闢。出陣。杓子。植物。細毛。
金魚。順序。特別。大勝利。栽培法。
宮中。投機。策華。律令。質素。
顧問。賄賂。會葬。構造。變態。

三、次の人名の讀方を片假名にて示せ。

清少納言。　張良。　實盛。　季房。
范蠡。　正儀。　劉備。　道眞。
田村麻呂。　熊王丸。

四、次の綴りの附線の箇所を漢字に改めよ。

(1) せいみつなるちづをせいす。
(2) かくこくこうしは、じたいの、えうゐならざるをさつす。
(3) しんきなるいんさつきかいをはつめいす。

汽ヲ用ヒ蒸氣船トイフトキニハ氣ヲ用フ

少小　季李、秀　苑菀　道途

精密。地圖。製す。各國公使。事態。容易。察す。新規。印刷。器械。發明。

春ハ暖カニシテ夏ハ暑シ。花開キ、鳥啼ク。
譽學擧　恥恥　聯連　逐遂

第三節　綴方

一、次の各題の二文を一文に改めよ。

(1) 春ハ暖カナリ。夏ハ暑シ。

(2) 花開ク。鳥啼ク。

(3) 風にさらさる。雨にぬる。

(4) 聯隊旗のてがらは國のほまれなり。聯隊旗のけがれは國のはぢなり。

(5) 兄は弟を慈む。弟は兄を敬ふ。

(6) 耶蘇教を排斥す。外國人を放逐す。

(7) 事態の容易ならざるを察す。共同防禦の方法を講ぜり。

二、左ノ漢字ノ上若クハ下ニ文字ヲ附ケテ二ツヅヽノ熟語ヲ作レ。

構。議。崇。評。裁。
講。製。明。儉。險。

◎答案の書方

構＝結構、構造。
崇＝崇拜、崇敬。
裁＝總裁、裁縫。
製＝精製、製造。
儉＝節儉、儉約。
議＝評議、議論。
評＝批評、評判。
講＝講義、講釋。
明＝透明、明細。
險＝危險、險阻。

三、左の口語を文語に改めよ。

(1) 苦しいことを忍ばぬならば、樂しい事もありますまい。(記事體)

(2) あなたは、何樣では、ゐらっしゃいませんかと、不意に問ひかけられました。(記事體)

(3) 御不自由ではありませうが私方に御出で下さって

も、ちっともさし支へはございません(候文體)

(4) 試驗がすみましたら、きっと御伺ひしやうと思て居ます(候文體)

第三章

第一節　講讀

一、次の文章の附線の個所の讀方及び意義を問ふ。

(1) 蜜蜂の群集生活を營むを得るは、共同團結して勞働をいとはず、有力なる武器を備へて敵軍にあたり、團體の爲には身命ををしまざるによる。

(2) 人ハ其ノ身體、才能ナドニヨツテ、仕事ニ適不適ガアル、分業法ニ依ルト、人々ガ其ノ最モ適シタル仕事ヲスルコトニナル。又毎日同シ仕事ヲクリカヘスカラ、誰モ早ク其ノ仕事ニ熟練スル。隨ツテ良イ品物ガ出來テ、

蜜蜂　密蜂　共供　洪　圍　圓　體　躰　体　蜂　烽　峰

製造高モ多クナル。

(3) 高德せめても此の所存を上聞に達せばやとて、行在所の御庭にしのび入り、大いなる櫻の木の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけたり。

(4) 近年は空中飛行器の發明諸國に起れり。空中の交通開始せられ、又其の軍事上に應用せらるゝも決して座上の空談にあらざらんとす。人智の進歩は際限なしといふべし。

(5) 當時の國學者は、皆敬神尊王の說を持して、心を國體の發揮に注ぎ、先づ古語を研めて古典に通じ、古典に通じて後に國體を發揮せんとて、寢食を忘れて多くの古文書を涉獵したり。

二、左の字句を解釋せよ。

諫　練　隨　惰　隋　所　所　空　穴　談　話　智　知　食　喰　詩　時　持　特　侍　涉　渉

(1) 光景まのあたり見るが如し。
(2) 眺望いよ〳〵開けて、滿目總べて花なり。
(3) 別離の宴を張りて舞をまはしめ給ひし所なりと傳ふ。
(4) 扇御。御心事、庭園。行幸、皇居。
(5) 歌書よりも軍書にかなし吉野山。

眺望（ちょうぼう）　挑眺（ちょうちょう）　光景（こうけい）　園円（えんえん）　圓（まる）　路途（ろと）　道（みち）　決快（けっかい）　決（けつ）

三、次ノ文字ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

蓄（たくはふ）　畜（ちく）　撿（けん）　險（けん）　儉（けん）　攻（せめ）　改（あらたむ）　撃（うつ）　繋（つなぐ）　精（せい）　清（きよし）

坂路。行宮。決死。和歌。離宮。
終日。維持。居室。營營。寸時。
勞役。檢査。貯蓄。任務。分離。
適當。增加。敵視。鋭利。攻撃。
複雜。藥品。溫室。場所。精神。
一致。目的。苦勞。發達。國家。

病院。運動場。決して。授業料。六角。注意。衣食住。物品。

運路、修繕、地球。缺乏、警戒色、出家。習慣、表面、發達。所在地、至急、注文。

隱穏

四、次の綴りを讀めぬ。

うんどうば。　じゅげふれう。　けつして。　ちうい。　ろっかく。　ぶっぴん。　いしよくじう。

第二節　書取

一、次ノ綴リヲ漢字ニ改メヨ。

ダウロ、シユウゼン。チキウ。
ケツバフ。ケイカイショク。シユッケ。
シウクワン。ヘウメン。ハッタツ。
ショザイチ。シキフ。チウモン。

二、左の文字の讀み方を平假名にて示せ。

隱岐。萬乘。無道。警固。主上。

萬万　警驚　復複

(1)協同一致分業。目的。
(2)君。還。無道。極。
(3)忠臣。勤王。兵。學。
(4)我。拾。海。富。
(5)二物。相俟。爲。難。

瀉　潟

風聞。臨幸。翌朝。會稽山。報復。
恥。海峽。名勝。形狀。両輪。
優美。構造。航行。方向。完備

三、次ノ附線ノ句ヲ漢字ニ改メヨ。

(1) キヨウドウイッチノ考ガナケレバ、ブンゲフノモクテキハ達セラレナイ。
(2) キミヲ遠國ヘウツシ奉ルコトムダウノキハミナリ。
(3) ヤガテ、チユウシンノ起リテキンノウノヘイヲアゲン。
(4) ワレハヒロハン、ウミノトミ。
(5) ニブツアヒマッニ非ラザレバヨウヲナシガタシ。

四、次の文字を諳書し得るまで習へ。

御神體。事柄。忠義。新潟。

熟　塾　化　北

警戒色。熟字。八尺。幼虫。
從事。客。消化。勅許。
首領。缺乏品。剛直。

第三節　綴方

一、次の文語を口語に改めよ。

(1) 車の兩輪の如し。
(2) 花に宿れる蝶は今眠さめたり。
(3) 右は地質さいひ、縞がらさいひ、此の地方には賣行よろしかるべし。
(4) 大小ノ船舶此ノ川ヲ上下シテ運輸ノ便スコブル多シ。
(5) 誰カハ義勇奉公ノ心ヲ起サザラン。
(6) 昔ハ人馬ノ往來甚ダ盛ナリキ。

輪　螺　蝶　課　輸　諭

使フ　遣フ
貯フ　蓄フ
恨む　怨む
勝れ　勝る

(7) 扇ヲ使ヘバ風起リ、ムナヲフルヘバ音ヲ發ス。是我等ノ周圍ニ空氣ノアレバナリ。

(8) 金錢ヲ安全ニ貯フルニハ郵便貯金トナスヲヨシトス。

(9) 少しも世をいきどほり、人をうらむる心なかりき。

(10) 天然の美は更に人工の美よりも勝れたり。

二、次の句の誤りを正せ。

雪降らんは未來。雪降るは現在。雪降りたりは過去。

(1) 父母の恩は、山よりも深く、海より高し。

(2) 昨日は、雪降らん。

(3) 濱地君は明日出立したり。

(4) 人は、滋養分を取らざれば、餓死せず。

◎答案の書方

(1) 父母の恩は、山よりも高く、海よりも深し。

(2) 昨日は、雪降りたり。

(3) 濱地君は明日出立せん。

(4) 人は、滋養分を取らざれば、餓死す。

三、次の口語を文語に改めよ。

(1) こらぞうした。命がをしくなったか、妻子がこひしくなったか。軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有樣は何事だ。兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。

(2) 昔の道中には馬とかごがあった。馬は馬子が引いて、ゆる〳〵歩むのだから、早いことはない。かごも人の肩でかいて、休み〳〵行くのだから、早くもないし、又そんなに樂でも無かった。

恥かしく。恥。
惜。
苦業。

四、次の文題を作れ。

(1) 病氣見舞の文。(候文體)

(2) 櫻(記事體)

第四章

第一節 講讀

一、次の文の附線の字句の讀方如何。且つ全文を解釋せよ。

(1) 我國の米は品質優良にして其の味最も美なり。

(2) 家畜の飼養に至りては、更に之を盛にし善良なる耕作用の牛馬、強健なる軍用の馬匹、滋養に富める乳肉等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

(3) 農は人の職業中最も健全、最も高貴にして、又最も有益なるものなり。

(4) 富國ト強兵ト相待ツテ始メテ國家ノ盛大ヲ致ス。強兵ヲ以テ知レタル我ガ國ハ富國ノ道ヲ講ズルコト今日ノ急務ニシテ、海外貿易ノ發展ヲ圖リ大イニ國富ヲ

善美 四正 健建 講構 殖植

增殖スルハ商人ノ國家ニ對スル義務ナリ。商人ハ軍人ノ戰場ニ立ツト同ジク、常ニ報國盡忠ノ精神ヲ以テ、平和ノ戰爭ニ從事スベシ。

(5) 就學兒童ノ數ガ年々增加シ、義務教育年限モ六年ニ延長セラレタノデ、此ノ改築ヲ計畫シ、今新校舍ノ出來上ッタノハ眞ニ慶賀スベキ事デアル。

二、次ノ綴リヲ讀メ。

キンケンチョチク。　ハクシキタサイ。

ブッピン。　シュチウキウカ。

ジシャウセッパク。　シュナヤウシヤ。

三、次の文句を解釋すべし。但し附線の字句の讀方を問ふ。

(1) 學制發布以來。

(2) 教育の普及發達。

就附付 數 眞直 勤倹貯蓄。博識多才。物品。暑中休暇。事情切迫。輜重車。 普晋

堅固（けんこ）　堅（たて）

(3) 學校の增設を要すること日一日より急なり。

(4) 本校舍の建築は質素堅固を主とし、外觀美ならざれども通風、採光二つながら其のよろしきを得。

(5) 私事は輕く公事は重し。

(6) 汝多年嘉明と不和なりと聞く。今之を推擧するは如何に。

(7) 水魚の交り。

鬪戰（たたかひ）　換替（かへ）

(8) 兩虎共に鬪へば、勢共に生きず。

(9) 船艦の修繕、船底の塗換等をする處を船渠といふ。

虐待防止（ぎやくたいぼうし）

(10) 國民は一つ心に守りけり遠つ御祖の神の敎を。

四、次の文の意義を問ふ。

(1) ごうぶつぎやくたいばうしくわいといふだんたいがあります。

憐悧（れいり）　逸る（はやる）　疲る（つかる）

(2) いぬは、れいりな、ごうぶつであります。

(3) うれいなければ、よろこびなし。くるしみのゝちのたのしみこそ、しんのたのしみなれ。

(4) はやるゆうきは、たわまねど、つかれしみをばいかにせん。

五、次ノ字句ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

肉（にく）　內（うち）　賣（うり）　買（かう）

朱肉。寫眞。模樣。戰爭。危イ命。

睡眠。錠。丈夫。商賣。特別。

疲勞。愉快。兵糧。參考。建立。

手段。攻守。皇運。劇場。遺族。

廢物利用。行宮。便宜。氣力。僥倖。

宜（ぎ）　宜（よろ）

六、次の句の解釋及び附線の讀方を問ふ。

(1) 大義名分。

(2) 名望高し。
(3) 慷慨の議論。
(4) ほしいまゝなる行。
(5) その寃を訴ふ。
(6) 市内、甚だ殷賑なり。
(7) 困難は最良の教師。
(8) 點滴、石をうがつ。
(9) 命を塵と戰ひし勇悍決死の士。
(10) 千尋の海の底。

慷慨 ほしいまゝ 寃 兎 困 因 點 默 穿つ

萬世一系。養蠶の農業。商人。石燈籠。炊事。

第二節　書取

一、次の假名を漢文に改めよ。

ばんせいいっけい。　やうさん。　のうげふ。
しゃうにん。(あきないにん)　いしどふらう。　すゐじ。

でんれいし。　きゃうこ。　しでうなはて。
かうべ。　みなこがは。　やなぎがうり。
けいかい。　せうくわ。　やさい。

二、次ノ綴リヲ漢字ニ改メヨ。

ケシキ。　オンシャウ。　キレフ。
ギロン。　セッパク。　ヒレフ。
ジッカウ。　サウソツ。　アンナイ。
リッリャウ。　セイチウ。　ハイエツ。

三、左の熟字の讀方を平假名にて記せ。

一群。　消化。　八百屋。　里親。　關係。
製造。　幸福。　增長。　野菜。　供給。
頂戴。　咳嗽。　境内。　沐浴。　牛肉。
收穫。　出納。　豫修。　療養。　肝要。

傳令使。京都。四條畷。神戸。湊川。柳行李。警戒。消化。野菜。

景色、恩賞、器量。議論、切迫、肥料、實行、匆卒、案内。律令、成虫、拜謁。

群 群 鮮 戴 載 鮮 沐 沐

梁（りやう）　渠（きよ）　巖（げん）　巖（いはほ）　紫（し）　柴（さい）

四、次の地名の讀み方を平假名にて記せ。

水戸。　八戸。　米子。　米原。
高梁。　巖原。　筑紫。　鰍澤。
撫養。　扇谷。

◎答案の書方

水戸。　八戸。　米子。　米原。
高梁。　巖原。　筑紫。　鰍澤。
撫養。　扇谷。

第三節　綴方

一、左ノ文語ヲ口語ニ改作セヨ。

(1) 此ノ神社ノ建テラレタルハ明治二年ニシテ、社殿ハ上古ノ風ヲウツシテ造リ、拜殿ノ中ニハカシコクモ天皇陛下ノ御製ノ歌ヲカヽゲタリ。

(2) 動物ノ中ニハ其ノ周圍ノ物ノ色ノ變ズルニシタガッテ保護色ノ變ズルモノアリ。タトヘバ北國ニスム野ウサギハ、其ノ毛色枯葉ノ色ト同ジケレドモ、雪ノ降ル頃トナレバ、全ク白色ニ變ジ、イカハ水中ニオヨグ間ハ水色ナレドモ、岩石ナドニ附着スル時ハ岩石ト同ジ色ニ見ユ。

(3) 日光の市街盡くる所に大谷川あり。岩にくだくる清流雪と散り、王と飛ぶ。其の上にかゝれる朱塗の橋、美觀先づ目を驚かす。是卽ち有名なる神橋にして、「日光の結構」こゝに始る。

(4) 敵の先頭部隊は直ちに砲火を開始せしが、我は之に應せず、距離六千メートルに近づきて始めて應戰し、はげしく敵を砲擊せしかば、敵の艦列忽ち亂れ、早くも戰列を離るゝものあり。

護穫（ごくわく）　頭（ずつ）　着（ちやく）　結（けつ）　列（れつ）

(5) 拜啓來る十五日は亡父十回忌に相當り候に付午後三時西方寺に於て法會相營み度候間御多用中恐入候へども御參列成し下され候はば有難く存じ奉り候敬白

二、左の文章中の□所に漢字を○所に假名を入れよ。

(1) 全國□數○佛像中、奈良の大佛の大○さの日本一○ことは□□すでに之を□れり。諸子よ試み○此の外に□□が日本一と思○□を數○見よ。

(2) 拜□いよ〳〵來月一日○○御入營軍務に□せられ□事御一家を□め一村の□□に御座候申すまでも○○御入營の□は品行□□職務に忠實に○○□中の□□となられ度候。

三、次の字句に誤りあらば正せ。

艱難。 羽織袴。 愉快。 古鄕。 保穫。

ついに。 なをさら。 あさがほ。 おをむき。

たとうるにものなし。 まわる。 にわごり。

◎答案の書方

羽織袴＝羽織袴

保穫＝保護

ついに＝つひに

たとうるにものなし＝たとふるにものなし

まわる＝まはる

にわとり＝にはとり

四、次の文題を作れ。

(1) 入學試驗期日を問合す文。(書簡口語體)

(2) 梅。(口語體)

第五章

第一節　講讀

一、次の各題を讀め、且つ解釋すべし。

(1) 防禦に力をつくしたり。
(2) 優劣を比較す。
(3) 一切ノ事件ヲ議決ス。
(4) 景色、畫の如し。
(5) 氣象に激變起る。
(6) 隱顯自在なり。
(7) かひがひしくたち働く。
(8) 外見を飾る。
(9) すこぶる前代の弊政を改む。
(10) 大に皇基を振起すべし。
(11) 虎ノ子ハ地ニ落チルヨリ牛ヲ食フ勢ガアル。

激邀　はげしくむかへ
顯現　あらはるあらはる
弊　へい
幣　へい

(12) 海ニ無盡ノ富アリテ、波路ニ行カレヌ所ナシ。
(13) 機關ノ構造精密ニシテ、巧妙ナルニハ一同驚嘆セリ
(14) 慈善家ハ、ミダリニ與ヘズシテ、正シク與フ。

嘆　たん
歎　たん
關　くわん
關　くわん
慈　じ
茲　じ

二、次ノ文字ヲ讀メ。

建長寺。　甘藷。　生糸。　海峽。　房總半島。
草薙劍。　七寶燒。　圓城寺。　宍道湖。　姑。
元寇。　定期航海。　書物。　皇居。　社寺。
提灯。　蠟燭。　唱歌。　半鐘。　壯麗。
景色。　廻廊。　海藻。　區域。　健康。

峽　けう
狹　けう
房　ぼう
戾　れい
劍　けん
劍　けん
宍　しし
穴　けつ
寇　こう
冠　くわん
廊　らう
廊　くわく
謁　つう
喝　かつ
育　いく
育　そだつ
盲　もう
盲　めくら
埋　まい
理　うづめ
儀　ぎ
議　ぎ

三、左の文字の解釋を問ふ。

神殿。　武運。　奇觀。　碇泊。　涖取の氣象。
義俠心。　自立自營。　出帆。　發見。　着手。
開拓。　謁見。　生育。　崇敬。　豫報。

閘港場。鐵道線路。合戰。原料。平等院。百姓。上流社會。東照宮。延暦寺。

刷

奥儀。　埋沒。

四、次ノ綴リヲ讀メ。

カイコウヂャウ。　テッダウセンロ。
ガッセン。　ゲンレウ。
ビャウトゥ井ン。　ヒャクシャウ。
ジャウリゥシャクゥイ。　トゥシャウグウ。
エンリャクジ。

五、次の文章の意義及び附線の句の讀方を問ふ。

(1) 一色の印刷は一度刷ればよいが、色のたくさんまじつた美しい繪畫や地圖のやうなものは、幾度も幾度も印刷を重ねなければならぬ。又極上品なるものになると機械では刷らないで手刷にする。

(2) 日本一の古き建物の今にのこれるは、大和の法隆寺なり。我が國の建物はおほむね木造なれば、古社寺等も昔のまゝにて今にのこれるは甚だ少し。然るに此の寺は今より凡そ一千二百年以前のものにて、昔ながらの形を存せり。恐らくば木造建築物中世界最舊のものなるべし。

舊　奮

(3) 總べて魚類は暗き處を喜び森林の影さす水中には多く集り來るものなるを以て、森林は漁業の爲にも大なる利益をあたふ。海岸又は河岸の森林を伐拂ひたる爲に、漁業の利を失ひたる地方も少からず。

功　切

(4) 眠龜ガ一身一家ヲ忘レテ、熱心ニ此ノ業ニ志シ、機械ヲ發明シ、國産ヲ廣メシハ大イナル功勞トイフベシ。

(5) 花ノ名ヨリ取レル桃色、紅梅色、藤色、櫻色、實ノ名ヨリ取レル橙色、柿色、葡萄色、小豆色、其ノ他鼠色、茶色、鳶色等

橙　蝕證　鳶

體禮　商商　穀穀　閉閉　餓蛾　進歩發達。　天文臺。　獨立國。　誤解。　埋沒。　彫刻物。　手傳。　牧畜。

色ノ名稱モ亦千種萬樣ナリ。

第二節　書取

一、次ノ文字ノ讀方ヲ片假名ニテ書ケ。

團體。　農工商。　增長。　退去。　價値。
擴張。　還俗。　拍子。　遺言。　無分別。
地殼。　總攻擊。　準備。　畢竟。　清淨。
長閑。　木質。　餓死。　前肢。　忘却。

二、次ノ綴リニ適當スル漢字ヲ問フ。

シンポハッタツ。　ジッチャウ。
テンモンダイ。　ドクリッコク。
ゴカイ。　シンタン。　マイボツ。
テッコクブツ。　テッダイ。　ボクチク。

三、次の文字の讀方を平假名にて記せ。

選撰　暖緩　蚕蠶　歴暦　納訥　識織　錄綠　翰幹

海藻。　腰ノ袴。　體ノ後端　足場。　暦學者。
要津。　飽食暖衣。　普通。　選擧。　助役。
千木。　蒔繪。　智識。　陶器。　蠶卵紙。
甘蔗。　蜘蛛。　佛閣。　保存。　眞珠。
延暦寺。　八王寺。　彰仁親王。　議定。　關白。

四、次の文字を諳書し得るまで習へ。

保護色。　警戒。　帳面。　皇居。　手段。
歴史。　汽車。　着物。　職業。　地熱。
親切。　客人。　食物。　植物。　忠節。

第三節　綴方

一、左の語に文字の誤用あらば正せ。

智幟。　貿易。　訥稅。　貨弊。　記緣。
須良。　書幹文。　裁培。　摶愛。　檢約。

◎答案の書方

智識＝智識。
納税＝納税。
貨幣＝貨幣。
記録＝記録。
須良＝精良。
書幹文＝書翰文。
栽培＝栽培。
搏愛＝搏愛。
檢約＝儉約。

栽培　搏億搏

綿棉

二、左の文の□所に漢字を○所に假名を入れよ。

(1) 我○□民も亦□先の遺風に從○一致□□して此の國家○護ら○○べからず。

(2) 船ヲ□ルニハ先○綿□○設計圖ヲコ○○ヘル。其ノ圖ハ□ノ切斷面□ヒ構成等ヲ何十分の一○○○縮圖

デ、多人數ノ技師ヤ技手ガ永クカ○○テ製圖スルカラ、大○ヲ戰艦ナド○○ルト、設計圖バカリデ數百枚○アルト○○。

技枝肢

(3) 我が國は氣候溫に、□味肥○、□めて耕種に適し、米麥の栽□は最も□く開け○○。古來瑞穗の國の名ある□□なり。

瑞　端　端

(4) 商人ノ第一ニ重○○ベキハ信用○○。□人○○○信用ヲ□フトキハ其ノ極終ニ破□ヲマヌカレズ。見本ト現物トヲ□ニシ、約□ノ期限ヲ違ヘ、平□ノ愛顧ニナレテ、□品ノ品質ヲ下スガ如キ皆□□ヲ害スル所以ナリ。信用ノ基ハ□□ニアリ。故ニ曰ク、正直ハ最善ノ商略ナリ。

終に　遂に

(5) 御□□拜見仕候來る八日□□□これあり候□にて

拜　拜

誘ふ　講話　講義　演說　訓諭　役　設計

御誘ひ□され有り□○存候仰の如く本村にも耕地整理の□要これあり折々會合の□は其の話も□で何れ熟□○上實行せんと申合せ□り候事こて此の□其の道の專門家の講話を□るは大いに□□と相成るべしと存候當日は本村の重なる□□も精々誘ひ合ひ是非會□すべく候取りあへず御□□まで。謹言

三、次の文題を作れ。

(1) 郵便

(2) 中學校に入る目的を問はれしに答ふる文

第六章

第一節　講讀

一、次ノ讀方及ヒ解釋ヲ問フ。

設計圖。　鍛工場。　附屬具。　造船所。

緻密　蝦　測候所　觀測　天氣豫報　側　觀　獻　蝶　蜂　花　飛廻る　汁　吸ふ　動物　呼吸作用　空氣中　酸素　炭酸瓦斯　吐出す　同化作用　盛　炭素　養分　放つ　名將　劒

氣象臺　測候所　觀測　天氣豫報

暴風雨　信號所　强弱　天氣要素

二、次の綴りを讀め。且つ附線の綴を漢字にて書け。

(1) てふやはちははなからはなへいそがしさうにこびまはつてはなのしるをすふ。

(2) ごうぶつはこきふさようによつて、くうきちゆうのさんそをすひ、たんさんがすをはきだす。

(3) どうくわさようといつて、さかんにたんさんがすをこつて、そのなかのたんそをやうぶんにしてさんそをはなつさようがある。

(4) めいしようのつるぎこうぜしこせんちやう。

(5) ことばやことばきよゝのあご。

(6) ひふんのなみだわきぬべし。

古戰場。遠き。迹。悲慎。涙。主婦。幼兒。育テ。大任。不在勝。感。化。最。察セ。子供。行儀。作法。責任。公德。公衆。衛生。社會。規律。公共。物品。大切。衆人。利害。行爲

三、次の片假名を漢字に改め、且つ全文の意味を記せ。

(1) シュフは老人にいたはりかしづく外、エウジをソダて上ぐるダイニンあり。男子は外に出でゝフザイガチのものなれば、エウジは母のカンクワを受くることモツトも多し。其の母によつて其の子をサツせよ。こいへるが如く、コドモのギヤウギ、サハフ等につきては、シュフたる人のセキニンモツトもオモし。

(2) コウトクとはコウシユウのエイセイを重んじ、シヤクワイのキリツを尊び、コウキヨウのブツピンをタイセツにする等、總べてシユウシンのリガイを考へて其のカウ并をつゝしむトクギを云ふ。

(3) 我が國のチハウジナダンタイは、府縣、市の二級或は府縣、郡、町村の三級に分れたり。其のトチにクワウケフ

徳義。地方。自治團體。土地。廣狹。組織。繁簡。精神。幸福。國運。發展。

傷。梅。低。抵。治。冶。輔。舗。

の差あり、其のソシキにハンカンの別ありこいへども、チハウジナのセイシンに基きて、其のダンタイのカウフクを進め、コクウンのハツテンを期するは一なり。

四、次の文章の讀方及び解釋を問ふ。

(1) 外國人に接するに人種、宗教、風俗の如何を問はず、いはゆる四海兄弟の精神を以て等しく之を親愛するは大國民の度量なり。國力我に劣れる國民を見て、やゝもすれば輕侮の念を以て之を迎へ、甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは、却つて我が國民の度量の狹く、品格の低きを示す所以にして、國交を傷つけ、隨つて國力の發展をさまたぐること多し。

(2) 我が國は萬世一系の天皇之を統治し給ひ、天皇は國務大臣の輔弼によりて一切の政務を親裁せさせ給ふ。

努務力（つとめつとめつとめ）

一

玉王（ぎよくなまたは）

嬬鬱（うつ）

條（でうしの）

しかして萬機公論に決するの聖旨に基づき、別に帝國議會を設けて、廣く衆議を聽く、機關に供せさせ給へり。

五、次ノ文字ノ解釋ヲ問フ。

鑄型。親切ノ報。模範。間道。帆檣林立。

協心。努力。秩序。陋習。外寇。

大器晩成。留學生。通辨。素燒。執着。

殺風景。渉獵。勤儉貯蓄。摘草。散歩。

貴重。豐饒。輔弼。逮捕。名利。

業務擴張。俎板。漂流。名勝。玉、樓。

國是。挨拶。紹介。指揮。媾和。

六、次ノ地名人名ノ讀方ヲ問フ。

沖島。瓜生。鬱陵島。長谷。

由比。鳥居勝商。長篠。信昌。

鄕（きやう）卿（けい）

穀物（こくもつ）、野菜（やさい）

大抵（たいてい）、日用品（にちようひん）・缺（カ）グ。

親戚（しんせき）、近所（きんじよ）

警察署（けいさつしよ）、裁判所（さいばんしよ）。

淸（シン）、義和團（ぎわだん）

暴徒（ぼうと）、耶蘇（やそ）教（けう）、排斥（はいせき）。

悅（エツ）說（セツ）

淋（リン）沐（モク）

調伊企儺。金崎。義鑑。稻生恒軒。

一豐。藤堂高虎。蒲生忠鄕。藺相如。

第二節　書取

一、次ノ文ノ符線ノ所ヲ漢字ニ改メヨ。

(1) コクモツヤサイナドタイテイノニチヨウヒンニハカグルコトナシ。

(2) 私ノシンセキノキンジヨニ、ケイサツシヨトサイバンシヨトガアル。

(3) シン國ノ北部ニギワダントイフバウト起リヤソケウチハイセキセントテ、大ニ世ヲサワガシタリ。

二、次ノ讀方ヲ片假名ニテ記セ。

大國主命。天然痘。悅服。美術。公園。

醬油。味淋。天長節。石垣。砂石。

墨（スミ）　黒（クロ）　出發。　藥劑室。
劑（ザイ）　濟（スム）　銚子。　木更津。　秩父絹。

學問上。　夜明。　墨。
愉快。　兵糧。

三、次の綴りの符線を漢字にて書け。

(1) だいしやうり。
(2) こどもはにんぎやうをもつ。
(3) きみはほうびを、もらつたか。
(4) わたくしはてつぱうをもつてをります。
(5) きのうかへりました。
(6) くはのはをしくしてせいちやうす。
(7) しくぶつをさいばいす。
(8) にはのさくらはすでにちりにけり。
(9) ちちはあわただしく、それを、とどめたり。
(10) やがてけいれいをして、につこりとわらつて、たちさつた。

大勝利（だいしやうり）　人形（にんぎやう）　褒美（ほうび）　鐵砲（てつぱう）　昨日（きのう）　乘（のり）、成長（せいちやう）、植物（しよくぶつ）、栽培（さいばい）　庭（にわ）、櫻（さくら）、散（ち）る　父（ちち）、留（とど）め。　敬禮（けいれい）、笑（わら）ふ。　去（さ）る。

派（はく）　脈（みやく）　衛（えい）　術（じつ）　牛（うし）　午（ご）　手（て）　娘（むすめ）　狼（おおかみ）　略（りやく）　略（りやく）　勿（なかれ）

四、次ノ文字ヲ諳誦シ得ルマデ之ヲ學べ。

歸宅。　派出。　呼吸。　衛生。　近所。
注意。　乘客。　自然。　參考。　盛大。
奉公。　手紙。　小川。　百姓。　左右。
正直。　規則。　粗略。　牛馬。　器物。
砂糖。　娘。　勿卒。　泣き出す。　笑ひつゝ。

第三節　綴方

一、次の文章の□所に漢字を、○所に假名を嵌めよ。

(1) 時間を□む心あらば、他人○訪問しても、□に要用の事○○を述べをへて還る○○。決して、他人をして、我が□○に空○○時間を費さしむべからず。他人も我と同じく時間を惜む□あるべければなり。

借（かる）　借（しやく）

徐除　仰抑柳　晴れ

(2) 食事は□ぐべからず。徐々に心地○○談話などして□○べし。急がば、消化を害す、心地惡しく□○ても亦同じ。

(3) 父上樣には、だんだん、□□□も、おなほりなされて□○うちに、お歸りなさ○○このこと。みんな、たいそー、□○でをります。仰のことは、□□、よく、こころがけてをります。○○○、御安心下さいませ。

二、次ノ漢字ノ上若クバ下ニ文字ヲ附ケテ二ツヅヽノ熟語ヲ作レ。

增。備。貯。行。勞。

勉。簡。清。直。寒。

三、次の文に誤字あらば之を正せ。

(1) 空滯れて氣暖かなり。

咲く　捧ぐ　群。鵄。施。獻。賤錢淺　賤　亞　次　絲　糸

(2) 紅梅の枝に二三輪の花が吹いた。

(3) 君に俸げし命惜しからず。

(4) 武功拔郡の者に、金鳩勳章を下賜せらる。

(5) 凱施兵を觀迎す。

四、左の事項を綴りて文章とせよ。

(1) 茶は飲料に供するものなり。

(2) 茶は古來より飲料に供せり。

(3) 貴賤ともに飲料に供せり。

(4) 近來主要の輸出品となれり。

(5) 生絲に亞げる輸出品となれり。

◎答案の書方

茶は、古來より貴賤ともに飲料に供するものなるが、近來は、生絲に亞げる主要の輸出品となれり。

五、次の文題を作れ。

(1) 衛生。(口語體)
(2) 入學したることを報ずる文。(書簡候文體)

第七章

第一節　講讀

一、次の綴りを讀め。

(1) わがみをつめって、ひとのいたさをしれ。
(2) こくかいぎゐんにせんきよせらる。
(3) どれいをかいはうすべしとのろん。
(4) しゃうごくてんのうは、そのおとないをほめさせたまひき。
(5) おほむね、ぎょれふをいとなみたり。

二、左ノ語ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

冥加。　懺悔。　會釋。　矛盾。　珈琲。

懺悔　纖

要塞。　占領。　笑ひながら。　英斷。　恩德。
束縛。　德望。　狙擊。　資本。　ふくる夜。
螺旋。　吝嗇。　帶封。　蛹。　鎭守府。

三、次の句を解釋せよ。

(1) 不案内の事。
(2) 公園の維持費。
(3) 謝意を表しけり。
(4) 景色いはんかたなし。
(5) 獨立の志を立つべきなり。
(6) 道路にある馬糞は所有主なし。
(7) 豪傑は必ずしも畏るべき風をなさず。
(8) たんぼには黃金波うてり。
(9) 破竹の勢。

矛　塞　寒　束　東　旋　施　茅　維　錐　椎　必　心

率先（ひきぬ）　卒（そつ）

勤（つとむ）　勤（すゐむ）

攘夷（はらふところこはす）　懷（くわいくわい）

墾（ひらく）　懇（ねんごろ）

律（りつ）　津（つ）

消（けす）　梢（こずえ）

候（さうらふ）　候（こう）

(10) 天は、みづから助くるものを助く。

(11) 率先して勤儉を行ふ。

(12) 尊王攘夷の論。

(13) 產額豫定しがたし。

(14) 土地開墾の業に從事す。

(15) 習慣は第二の天性。

四、

次の文章の讀方及び意義を示せ。且つ符線の字句は特に解釋すべし。

(1) 兵營內の生活は規律正しく、朝の起床より夜の消燈まで、一々喇叭の合圖により、又毎日朝夕兩度の人員點呼も御座候。毎週土曜日の午後には居室、兵器、寢具其の他一切所持品の清潔檢査これあり候。兵器は軍人のたましひに候へば、其の手入は最も念入に致し候。

初（はじめ）　始（はじめ）

往（ゆく）　住（すむ）

(2) 此ノ銅山ハ發見ノ當初ヨリ產出高スコブル多ク、江戸城及ビ日光東照宮等ノ造營ニ用ヒタル銅ハ、大抵此ノ山ヨリ產出シタルモノナリトイフ。然レドモ其ノ頃ハ掘取リテッキ分クル方法ナホ不十分ナリシカバ、產出高ノ割合ニハ人手ヲ要スルコト多カリシナリ。

(3) 興福寺ノ五重塔高ク其ノ北ニソビユ。此ノ寺ハ藤原氏ノ氏寺ニシテ藤原不比等ノ建立セシトコロ、昔ハ境內方四町、堂塔雜舍ノ數百七十五アリ、規模極メテ大ナリシガ、今ハ往事ノ三分ノ一ニモ足ラズ。縣廳、裁判所、師範學校、高等女學校等ノ敷地ハ皆昔ノ興福寺ノ境內ニ在リ。

五、

次ノ文章ノ解釋ヲナセ。且ツ附線ノ讀方ヲ問フ。

(1) 上野ノ東北部、越後ノ國境ナル利根岳ヨリ發スルサ

サヤカナル細谷川ハ流レ下ルニシタガヒテ、數多ノ小流ヲ集メ、沼田町ニ至ル。是ヨリ赤城、榛名ノ二山ノ間ヲ、流レ、南流シテ吾妻川ヲ合セ、前橋市ノ西ヲ過グ。前橋市ハ人口四萬アマリ、有名ナル生絲ノ市場ナリ。

(2) 今は水路に汽船があり。陸上にも所々方々に鐵道が通じてゐる。鐵道の通じてゐない所でも、馬車や人力車がある。其の上道もよくなり、橋も多くかけられた。關所も無ければ、川止も無いから、僅かの旅費、僅かの日數で、女子供でも安樂に旅行が出來る。

(3) カノ名高キ箱根七湯ハ、開ケ行ク明治ノ御世ト共ニ益々サカエテ、浴客年ニ其ノ數ヲ加フ。七湯トハ湯本、塔ノ澤、宮ノ下、堂ヶ島、底倉、木賀及ビ蘆ノ湯ヲイフ。

六、次ノ讀方ヲ問フ。

彼方。印刷物。常備艦隊。名譽。農產物。壓服。兄弟。鐵橋。樟腦。勤勉。牛肉。天主閣。

(1) 金魚、魚
(2) 順序方法
(3) 關所敬

籤川。八岐。酒槽。神劍。倭姫。薩拂ふ。熱田神社。朝顏。權現堂。鬼怒川。

第二節　書取

一、次の綴りを漢字に改めよ。

かなた。　いんさつぶつ。　じゃうびかんたい。
めいよ。　のうさんぶつ。　あっぷく。
きゃうだい。　てっきゃう。　しゃうのう。
きんべん。　ぎゃうにく。　てんしゅかく。

二、左の文の付線を漢字に改めよ。

(1) きんぎょは、きれいなうをです。
(2) 製紙のじゅんじょはうはふをかたらん。
(3) せきしょやぶりこいつて、はりつけにするのであつた。

(4)常、衛生、身體、衣服、住居、

鑛礦（くわうくわく）　壓厭（あつをん）　磐盤（ばんばん）

(4) 人はつねに、ゐいせいを重じて、しんたい、いふく、ちうきよを清潔にすべし。

三、次ノ文字ノ讀方ヲ片假名ニテ書ケ。

明鑾。　脚袢。　彰化。　基隆。　城壁。
新高山。　臙脂獸。　硫黃。　宗谷岬。　五稜廓。
天井。　密接。　奈良朝。　鑛物。　壓力。
露。　霜。　雪。　磐梯山。　破壞。
電。　激變。　膨脹力。　熔岩。　櫻島。
圓錐。　複雜。　地獄。　總稱。　追賞。

四、次ノ漢字ニ片假名ヲ附セヨ。

雛形。　怜悧。　眞紅。　菜種ノ花。　簡單。
顏。　鼻。　腹。　腸。　珊瑚の環。
松脂。　炊煙。　土窟。　大湊。　敦賀。

泌（ひつ）　秘（ひ）　頭（あたま）（かしら）　網（あみ）　網（つな）

五、次ノ文字ヲ諳書シ得ルマデ習ヘ。

勞働。　頭。　六角。　里親。　分泌。　食事。
訪問。　待遇。　警報。　合戰。　網。　住居。
事情。　歡迎。　武運。　種類。　保護。　横糸。

足袋。　跣足。　日和。　芝居。　寢床。　透明。

第三節　綴方

一、次の語を文に改むべし。

(1) 善い事は、心に思ふと同時に、きっと、實行せねばなりません。(記事體)

(2) 四季の景色は、いづれも宜しうございますが、いきいきとして、きもちのよいのは、春のながめでございます。(記事體)

(3) 明日おひるまでにゐらっしゃいますならばお供い

たしたうございます。(候文體)

(4) お姉さんが、今度御歸りなさいましたそうですが、さぞおうれしうございませう。(候文體)

◎答案の書方

(1) 善き事なりと、心に思ひし時は、必らず之を實行せざるべからず。

(2) 四季の景色は、いづれまさりおとりはなけれども、とりわけ生々と心地よきは春のながめに限るかな。

(3) 明日正午までに御出で下され候はゝ御供致したく存じ候。

(4) 此度お姉様御歸り遊ばされ候由嘸御嬉しきことゝ存じ參らせ候。

正午　嘸

二、左ノ文字ヲ用ヰテ、二ツヅヽノ熟語ヲ作レ。

家。　近。　地。　生。　両。

力。　無。　主。　山。　味。

三、次の文を書翰體に改めよ。

(1) 御病氣は、昨今、いかゞですか、先日、金光君が御見舞に參って、歸っての話には、大分、御輕快との事で、何よりの御事と、級中一同安心しました、しかし、病氣は慨復期が大切だといひますから、精々御加養なさる樣祈ります

(2) 御尋ねのことは、學校で聞き合しましたら、まだしかとは、わかりませんが、たぶん、入學試驗は、あるだらうとのことで、ございました。

輕快　快方　加養　養生

四、次の文題を作れ。

(1) 朋友。(記事體)

(2) 病氣見舞の文。(口語書簡體)

第八章　講讀

第一節

出發　發足
漁舟　漁火
筆紙に盡し難し

一、次の文章の讀方及び附線の字句の解釋を問ふ。

(1) 某地の櫻は、吾が地方に、鳴る。花時毎に來遊するもの前後相連るとかや。吾が鄉、これと遠からざれども未だ往いて觀るを果さず。常に、恨みとせしに、この頃南枝既に笑を呈すと聞きて、遊意おさへがたく、二三の學友を語らひて、遂に、出發しぬ。

(2) 鵜はくぐり入る毎に獲物なくして浮び出づることを少ければ、漁夫は一時間餘にして數千百尾の鮎を得るを常とす。數隻の漁舟相並び、波にくだくるかゞり火の下に、百にも近き鵜、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかくれ、此處にあらはれ、之を取圍みて、數十隻の遊船、岐阜提灯の光を水にうつせる奇觀は筆にも言葉にも盡し難し。鵜なはを引上げて、鵜のふなばたに立並べる時、半月

鵬翼　鵬翼
霞　霧
錦　綿
檀　壇

金華山の上に出でゝ、川風たもとを拂ふも快し。

(3) 春の初花、秋の月、夏の青葉に、冬の雪、移りゆく世の有樣に、心驚くことあらば、過ぎし月日を數へつゝ、學の業を勵むべし。

(4) 春は島山霞に包まれて眠るが如く、夏は山海皆緑にして目覺むるばかりあざやかなり。秋の山は紅葉の錦を織り、冬は木々白雪の綿を重ぬ。両岸及び島々、見渡す限り田園より開けて、毛氈を敷けるが如く、白壁の民家の其間に點在す。

二、次の句の意義及び附線の文字の讀方を問ふ。

(1) 率先して勤儉を行へ。

(2) みすぼらしい小屋。

(3) その遺憾思ひやるべし。

武勇、學びの道。
芭蕉布、紬
泡盛、漆器
掘立小屋、家、住む。
覿
覿
拍
柏

(4) 無慘の死を悲む。
(5) 海は共有の寶藏なり。
(6) 忠言耳に逆へども行ひに利あり。

三、次の綴りを讀め。

(1) ぶゆうひとにすぐれ、まなびのみちもまたあさからず。
(2) このちばせうふつむぎ、あわもり、しっきなどをさんす。
(3) アイヌは、ほったてごやのやうないへに、すまってゐる。

四、次の、解釋ヲ問フ。

參觀交代。 侍所別當。 拍手喝采。 歸朝。
饗應。 殖産興業。 無下。 哀悼。

濯
曜
徽
徽

紡績會社
遠洋漁業
醬油、醸造
補助輸卒
衣服、洗濯

五、次の文字を讀め。

勤儉。 勳勞。 必須。 丁寧。 川底。
鯛。 手紙。 左右。 旅行。 宿屋。
衣服。 洗濯。 汽車。 乘客。 夜中。
候ふ。 勉勵。 朝夕。 商業。 繁昌。
進歩。 眼鏡。 防禦。 徽兵。 旅團。

第二節 書取

一、左ノ片假名ヲ漢字ニ改メヨ。

(1) バウセキクワイシヤ。
(2) エンヤウギョゲフ。
(3) シャウユをジャウザウす。
(4) ホジョユソツ。
(5) イフクのセンタク。

家屋、修繕
浮塵子の驅除。
雞、飼、
薪。採。
聯隊、指揮
盪帶、人類
生活、適當
腕　椀
裁……證據
紅葉。

(6) カオクのシッゼンす。
(7) ウンカのクジョ。
(8) ニハトリをカッタリ、タキギヲトッたり。
(9) レンタイ長のシキに從ふ。
(01) オンタイ地方は、ジンルヰのセイクワッするに、もっともテキタッす。

二、次ノ讀方ヲ片假名ニテ示セ。

螟虫。　鶯。　蜻蛉。　消費。　小腕。
參宮。　八咫の御鏡。　姑。　礎、　棟。
和蘭人。　全體。　覆へし。　結果。　風通し。

一、左の線を引きたる所を漢字にて書け。

(1) さい判に必要なるしょうこ物
(2) 秋のもみぢ。

紫。紺。綠。
堅忍不拔。
常、規律、
守、働、遊
習慣、養ふ
箸　著

候はゞ(未來)
候間(現在)
候ひしが(過去)

(3) むらさき。こん。みどり。(色の名)
(4) けんにんふばつの精神。
(5) つねにきりつをまもりて、よくばたらき、よくあそぶしゅくわんをやしなふべし。

四、次の文字を諳書し得るまで習へ。

鍛冶。　節句。　砥石。　修繕。　届。
戒。　箸。　八挺。　無骨男子。　屏風。
干城。　柱石。　金剛山。　氷山。　麥稈。

第三節　綴方

一、左の文句に誤りあらば正せ。

(1) 家業日々に榮へたれば、堪へ難き望鄕の念にうたれたり。
(2) 私事相變らず壯健にて候はゞ御案じ下されまじく

授　綬

候。

二、次ノ漢字ヲ用井テ二ッヅヽノ熟語ヲ作レ。

便。　枝。　債。　製。　模。　報。　授。　親。

三、左の文の□所に漢字を、○所に假名を入れよ。

(1) われ□は、忠良○○帝國臣民として、大いに、その□□の遺風を、顯彰せん○○を□めざるべからず。

(2) 衣□住の三つは、人々の一日○、□ぐべからざるものにして、その□□によりて、國の□□の度をも、うかゞふことを□べし。

四、次の文題を作れ。

(1) 遠足に友をさそふ文。(口語書簡體)

(2) 春のけしき。(口語體)

(3) 雨。(記事體)

姑　枯　雖　磨

第九章

第一節　講讀

一、次ノ文ノ附線ノ句ノ讀方如何。且ツ全文ノ解釋ヲナセ。

(1) 王政復古は、ひとへに、皇室の御稜威に由るこはいへまた、國學者の國體發揮に力めしより、慨慷氣節の士、靡然として、相和し、遂に、空前の偉業を奏するに至りしなり。

(2) 平生田舍にのみ住める人は、たまたま大都會に立ち出でなば、繁華と便利とに驚きて、或はいつまでもこゝに居つきたしと思ふべく、都にのみ住める人は、あだかも、その反對に或は田舍の長閑けさを羨むべし。人はともすれば、餘所の境遇を羨むものなり。

(3) 世に忌むべきは、放縱懶惰もしくは、姑息無氣力にし

懶　瀨
忽（ゆるがせ）
任　仕
釘
針
擔　檐　膽

て、責任を守らず、職務を忽にする者なり。これに反して、世に尊ぶべきは、責任を重んじ、職に忠なる者なり。ことに、その職に殉するものに至りては、人間の事業中最も神聖なるものといふべし。

二、次ノ綴リヲ讀メ。

(1) ヨアケゴニテキガキタ。
(2) ジッキハ、グンジンノセイシンナリ。
(3) ミニ、シミジミト、シミワタッタ。
(4) オヤノ、ルスナッニ、アタマガ、イタクナリ、オホイニコンナンセリ。

三、次の語の解釋を問ふ。

豫算。　さびれゆく。　裝飾。　技術。　無頓着。
凱歌。　熟讀玩味。　糠に釘。　舊蹟。　分擔。

流鏑馬
母衣
鏑
摘
敵

演習。　情況。　事變。　美麗。
行儀。　機關手。　風俗。　氣焰を吐く。　掛値。
見當違ひ。　遺憾。　距離。　確實。　無慮。

四、次ノ文字ヲ讀メ。

遠足。　三樫。　流鏑馬。　境内。
割據。　母衣。　遵守。　研究。
從者。　奪掠。

五、左の句の意義及び附線の文字の讀方を問ふ。

(1) うしろめたし。
(2) 新奇を好む。
(3) 光消え行く弓張りの月。
(4) すなどるわざ。
(5) 油斷大敵。

蝙蝠　(6) 鳥なき里の蝙蝠。
驗　(7) 時後れけん驗だになし。
等閑　(8) なほざりにせしことを悔ゆ。
(9) 力をためす試金石。
(10) 影響を與へたるは西洋思想の輸入なり。
(11) 天顔に咫尺す。
(12) 滿腔の同情。
(13) 遜色なし。
開く　(14) 開いた口が塞がらぬ。

第二節　書取

一、次の假名を漢字に改めよ。

(1) しゅくわく。(ユクモツノトリイレ)
(2) さうしょくひん。(カザリノシナ)
(3) きんけん。(ツトメテ、ケンヤクスルコト)
(4) ねじひ。(モチツヾケルヒヨウ)
(5) ふくざつ。(コミイリタルコト)
(6) しゃし。(オゴルコト)
(7) もはん。(テホンノコト)
(8) くんらう。(テガラホ子チリ)
(9) あんねい。(ヤスラカナルコト)
(10) くわいてん。(マハルコト)
(11) ぞうり。(フミモノ、名)
(12) ひっすう。(ヒツヤウノコト)

收穫。
裝飾品。
勤儉。
維持費。
複雜。
著侈。
摸範。
勵勞。
安寧。
廻轉。
草履。
必須。
粟　栗
脹　張
刀　刀

二、次ノ漢字ノ讀方ヲ片假名ニテ記セ。

粟。　藥。　疲。　袖。　膨脹。
彩色。　招魂社。　燈籠。　靈妙。　白刃。

三、次の文字を諳書し得るまで習へ。

規律。習慣。養ふ。精神。風土。

呼吸。連絡。適當。婦德。鑛物。

第三節　綴　方

一、左の送り假名に誤りあれば正せ。

(1) 空中の水蒸氣、冷やかなる風にあれば、忽ち、冷へて雲となる。

(2) 時下、追々、暑さを覺へ申し候。

(3) 向ふの山腹に、學校が見へてゐます。

(4) 庭に、奇麗な樹が植にてあります。

◎答案の書方

(1) あれば――遇へば

冷へて――冷えて

(2) 覺へ――覺え

(3) 見へて――見えて

(4) 植へて――植ゑて

二、次ノ文語ヲ口語ニ改作セヨ。

カレノ便利ニカフルニ、コレノ心安サアリ。イヅレヲマサレリトモ定メガタシ。ハデナル娯樂コソ田舍住居ニトボシケレ。衛生上其ノ他ノ危險ナキハ、其ノ失ヲツグナヒテ、餘リアルベシ。

娯樂ヲ誤リ。達ヲ書クハ誤リナリ。

三、左の文語を口語に改めよ。

(1) 我國の武士道は、年とともに、いよ〳〵、發達し、今や國民全體の精神となり、ひとり、文弱の弊をすくひしのみならず、内はよく國を治め、外はよく國威を輝かせり。

四、次の文題を作れ。

(1) 運動會のあんない。（口語書簡體）

(2) 秋の野山。(口語體)
(3) 夕立。(記事體)

第十章

第一節　講讀

一、左ノ文ノ讀方及ビ附線ノ字句ノ解釋ヲ問フ。

(1) 水ハ方圓ノ器ニ從ヒ、人ハ善惡ノ友ニヨル。
(2) 他山ノ石。
(3) 禍福は糾へる繩の如し。
(4) 汝ヨク此ノ書ヲ學バヾ、遂ニ王者ノ師タラン。
(5) 見ル者アザケリ笑ハザルハナシ。
(6) 一時ハ赤貧洗フガ如キ有樣トナレリ。
(7) 人才を登用す。
(8) 智識を世界に求めん。

糾叫　嘲リ　貧貪　登昇

(9) 噂をすれば影さやら。
(10) 影彰し。
(11) 間然する處なし。
(12) 良藥は口に苦けれども病に利あり。
(13) 聖人は尺璧を貴ばずして寸陰を貴ぶ。
(14) 巧なる形容。
(15) 配所の月。
(16) 丁年に達す。
(17) 未曾有のこと。
(18) 潮のごとく城内に入りこみぬ。
(19) 人々たゆみなく防禦に力をつくしたり。
(20) 言ふは易く行ふは難し。

腑　潮　腑

二、次の文の讀方及び全文の意義を記せ。但し附線の字句腑に落ちぬ樣子。

煙・烟

臭・嗅

塩・鹽

効・效

寂し

は特に解釋せよ。

(1) 兵舍内にては歌をうたふ事、高聲にて談話する事、所定以外の場所にて煙草を吸ふ事等堅く禁ぜられ居り候。多人數の共同生活に候へば、是はもとよも當然の事に候

(2) 温泉のわき出づる處はおほむね火山の附近に在りて、四圍の風光麗しく、神氣自らさわやかなるを覺ゆ。其の湯には大抵一種の臭氣あり、味あり、色あり。是種々の鹽分をふくめるが故なり。温泉の諸種の病を治するは、たゞに其のふくめる鑛物の効のみならず、一つには又地を轉じて清新なる空氣を吸ひ、美麗なる風光に接するが爲なるべし。

(3) 此地はさびしき漁村にして、海岸のながめもよろしく氣候の變化も亦少く、誠に絶好の場所と存じ候、殊に海は遠淺にして、波靜かに、海底の砂細く、海水浴場として、至極適當に御座候。

浴・沿

磯・機

慈善、郵便　稽古。活版刷、停車場、贅澤品。博覽會、運刻欠席。藍綬褒章、養育院。

三、

次の漢字の讀方及び解釋を問ふ。

卒倒。雄姿。燈籠。啓發。遠足。

課程。磯邊。猛獸。感佩。絶佳。

割烹。散在。相手。死骸。勿論。

第二節　書取

一、次ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

ジゼン。　ユッビン。　ケイコ。

クッツパンズリ。　テイシャバ。　ゼイタクヒン。

ハクランクッイ。　ナコクケッセキ。

ランジュボッシャウ　ヤッイク井ン。

二、次の讀方を平假名にて書け。

青海原。　扶桑の國。　五月雨。　節句。

吝嗇。　煢焚。　石墨。　酸素。

馬鹿。　鍛冶。　水雷母艦。　傳令使。

三、次ノ片假名ヲ漢字ニ改メヨ。

(1) コダイフウのケンチク。

(2) テキタウのモンジをホツクすべし。

(3) カスガジンシヤはナラシにあり。シヤデンはサウレイにして、ソノクワイラウには、ムスウのカナドウロフをツリたり。また、シヤゼン、ロバウなどには、イシドウロフ極めて多し。

四、次の字を諳書し得るまで習へ。

慈善。　郵便切手。　生花の稽古。　便船を求む。

汽車の連絡。　缺席屆。　遲刻。　立憲。

談話。　材料。　團結。　散歩。

第三節　綴方

一、次の語句中に誤れる文字あらば、之を適當なるものに改めよ。

(1) 凱旋軍隊歡迎。

(2) 勤險貯蓄。

(3) 發物利用。

(4) 車馬の住來織るが如し。

(5) 物に本末輕重あり。

二、次の文章を口語體に改作せよ。

(1) 西行も、和歌にうき身をやつして、天下を行脚せしのみならは、さまで偉とするに足らざれど、絶大の暴僧文

辟易（ヘキエキ）　破單衣（ハタヒトヘ）

覺を辟易せしめ、當時の將軍をして、兵を講ぜんことを請はしめし膽氣と武術とありてこそ、脫俗非凡なりといはるゝなれ。

(2) 一椀の澁茶も、疲れたる旅客には、千金のたまものよりありがたかるべく、一片の笑も、憂あるものには限りなき樂みなるべく、一足の古足袋、一枚の破單衣も心の誠をこめて與ふれば、金剛石の頸飾よりもありがたく感ずべし。すべて慈善は金高にあらず、品物にあらず、心なり。

三、次ノ文字ノ上又ハ下ニ任意ノ字ヲ附ケテ、或熟語二ツ以上ヲ作レ。

温。　公。　圖。　領。　清。

樹。　記。　威。　全。　肝。

鵜（ウ）　鵬（ホウ）　鴨（カモ）　瀑（バク）　瀧（タキ）　苗（ナエ）　笛（フエ）　栃（トチ）　栃（クヌギ）

四、次の文題を作れ。

(1) 蠶。（記事體）

(2) 海國男子（口語體）

(3) 暑中見舞の文。（口語書簡體）

第十一章

第一節　講讀

一、次ノ漢字ノ讀方ヲ問フ。

有明海。　筑紫平野。　觀學。　俳句。

運河。　輕氣球。　瀑布。　稅所敦子。

鵜越。　藤蔓。　笠置落。　國家安康。

華嚴。　鬼怒川。　苗代。　栃木縣。

二、次の綴を讀め。

(1) せうこんしやに、さんけいす。

(2) きしやう、げきへんをおこして、ばうふうこなる。
(3) なごやは、あいちけんちゃうのしよざいちなり。
(4) みすぼらしいこやをたてゝ、むすめひとりと、かつかつ、このよををくってをるやもめがありました。
(5) ちゅうせつ。れいぎ、しゃうぶ、しんぎ、しっそは、ぐんじんのたからなり。

三、

次の句の讀方及び解釋を問ふ。

(1) 柳綠に、花紅なり。　紅（くれなゐ）
(2) 雲井に聳ゆ。
(3) 費用のおびたゞしきをうれふ。
(4) 秘密はまゝ私曲偏頗の媒となる。　媒（なかだち）
(5) 能ある鷹は爪をかくす。　爪（つめ）
(6) 瓜の蔓に茄子はならぬ。　瓜（うり）

(7) 同類相求む
(8) 艱難は、汝を玉にす。
(9) 修養なき人は、一朝、逆境に陷れば、懊惱煩悶、從容事を圖るに堪へず。
(10) 新思想と舊思想とは、常に、矛盾衝突をまぬがれない　衝（しようとつ）

四、

左の全文の意義及び附線の字句の讀方を問ふ。

(1) あゝ何の無骨男子ぞ、昨日は勇にして今日は怯となる。汝斯くの如くにして、なほ、國家の干城を以て自ら任ずるか、慚死せよ慚死せよ、もし、世に斯の如き男子のみなりせば、我が國の先途をいかにせむ。　怯（けふ）　干（かん）　慚（ざん）
(2) 近來、實業の聲は、全國を動かせり。固より實業に非ざれば、國を富ます事能はず。然れども、實業は、利己に傾き易き弊あり。此弊害を除かざれば、實業は國家の用をな　法（はつ）　法（ほう）　于（う）　漸（ぜん）

關　閑

さず。

(3) あたりの景色を眺むれば、四方の山々には、霞の幕を張り、つゞく菜畑には、花の筵を敷けり。農夫が鋤鍬の手を休めたるも、道行く人の歩みの遲きも此の景色を眺めんとてなるべし。

(4) 汽船に乘りて、赤道直下の大洋にあり見渡せば、水天相交る東の方には、棚引く雲、紫かゝれる紅の色を帶びて、入日の景色にも似たり。靜けさ美しさめいじやうすべからず。さる程に、雲は、愈々、ゆらめきて、色は愈々紅となり、寄せ來る波は、一波ごとに、其のうねり漸く高し。やがて、太陽は、燦爛として、かゞやき出でたり。都會にては今頃は、こう〳〵として、熱鬧の始まれる時刻なるべけれど、こゝ大海原の眞中は、天地なほ眠れるが如く靜なり。

博識多才。

各自、名譽保全、妨害義務。

根、莖、葉實、食ひ、養分、吸取る、作物。

蘭　摩　斐

蘭　磨　悲

第二節　書取

一、次の片假名を漢字に改めよ。

(1) ハクシキタサイの人。

(2) 人は、カクジのメイヨを、ホゼンする權利と、他人のめいよをバウガイすべからざるギムとを有す。

(3) 虫類の中には、チ、クキ、ハ、ミなどをクひ、或は、そのヤウブンをスヒトッて、サクモッを害するものあり、

二、次の漢字を平假名にて書け。

種子島。　薩摩絣。　室蘭。　獵虎。

鵜飼。　傍。　多治見。　揖斐川。

寢覺床。　千曲川。　親不知。　透綾。

若狹塗。　奉書紬。　春慶塗。　津輕富士。

三、次の文字を諳書し得るまで書け。

防禦。修繕。手桶。書籍。賣買。
皇運。食料。野菜。馬齢著。機嫌。
帶封。賞賛。模範。自信。安神。
普及。羨焚。文明の利器。娯樂。田舍。
四通八達。朝。晩。不潔。傳染病。

第三節　綴方

一、次の二文を一文に直せ。

(1) 馬は人を乘す。馬は走る。

(2) 物ヲ大切ニセヨ。物ヲ粗末ニシテハナリマセヌ。

(3) 今日の學びを今日なせよ。必ず明日をたのむなよ。

(4) 稻ハ田ニ作ル。麥ハ畑ニ作ル。

(5) 弘前市は第八師團司令部のある所なり。大湊に水雷團の設あり。

(6) 虎ハ熱地ヲ撰ブ。熊ハ寒地ヲ好ム。

二、左ノ文字ニ誤アラバ正セ。

柳行季。　日向儀。　僅王。　慈善與行　給全。

三、左ノ漢字ニ似タルモノ、各々二ツ以上ヲ列記シ、且其音ト訓トヲ記セ。

柳。　悔。　穫。　壞。　傳。

四、次の口語文を書簡體に改作せよ。

やう〳〵暖かになりました。おかはりはございませんか。さて、わたくしは、この月で高等小學校第二學年の課程をへるはづでございますから、來月から御校の第一學年に入學いたしたいので、選拔試驗の用意を致して置きたいと、おもひますが、どんな事を調べておい

選撰　僅謹　儀議　壞穰　傳博

たらよろしうございませらか、御手數でございますけれども、くはしい事を御知らせ下さいませ。

五、次の文章を作れ。

(1) 祭日に人を招く文。(書簡候文體)

(2) 雪。(記事體)

(3) 收穫。(口語體)

第十二章

第一節 講讀

一、次ノ漢字ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

淳朴。 鱗次櫛比。 四通八達。 羨望。

車馬絡繹。 大厦高樓。 靜慮。

烹殺。 芝生。 佳境。 山水明媚。

笠縫邑。 驅逐隊。 棹。 楫。

無雙の能書。 惡臭。 契沖。 蕃殖期。

紳士。 霖雨。 裨益。 萬里觀光の客。

障礙を排す。 痴鈍。 精華。 服膺。

井然。 容貌秀麗。 威風凜烈。 財祿。

偉丈夫。 厄介者。 奏請。 人爲。

月光閃々。 黎明。 輔弼。 要訣。

二、次の句の讀方及び解釋を問ふ。

(1) 動もすれば顚覆せんとす。

(2) 病は口より入るもの多く、禍は口より出づるもの少なからず。

(3) 我軍の勇敢精鋭なるは、萬國無比にして、列國の齊しく羨望する所なり。

(4) 始あり、よく終あるは、拔群非凡の人にして、一心不亂

寂しい　淋しい　謙へりくだる　鎌かま

になり得る人之を能くす。

(5) その性、快活、温順、その語は、慇懃その行は、著實なり。

(6) 寂しかりし僻地も、今は屋宇櫛比の都府となるに至れり。

(7) 思ひなやむ。

(8) 謙遜を旨とせよ。

(9) ゆめゆめ怠るな。

(10) 學問の要は活用にあり。これを活用せざれば、無學にひとし。

(11) 我國の蒼生は、永く太平の福を受く。

(12) 身體を清淨潔白にするは、衛生上肝要なり。

(13) まなびの庭につどふ子よ、撓まず摘めよをしへ草。

(14) 梅の枝傳ひて、鶯のまだ調はぬ聲にて鳴きたるは、い

憚かる　禪ぜん　哲てつ　智ち

とめづらし。

(15) 親しきなかにも禮儀あり。

(16) 荒地を開墾して、益々美田良甫を增加す。

(17) 過て改むるに憚かることなかれ。

(18) 教の山にしをりあり。

(19) 先哲の經營慘憺たるを見よ。

(20) 名も知れぬ花、われ劣らじと咲き亂れたり。

三、

次の文章の讀方及び附線の句の解釋を問ふ。

(1) 春季休業は來りぬ。いざあすは、わが故里へ歸らむ。日はくれたり、雨も止みぬ。窓ににほへる夕月の影は、はやくもあすの晴天ならむを知らせがほなり。あなげにも樂しき心よ、いでさらば、あけなんあすの更に樂しかるべきを想ふて、われは、あたゝかきこよいの夢に入らむ

懸崖　**澎湃**　**爽快**

かな。

(2) 漆器とは、膳、椀、重箱、硯箱、菓子器等、凡て、漆を塗りたる器具の總名なり。此の製作は、我が國人が、殊に長じたる技術にして、外國人も、甚だ是れを賞揚すといふ。

(3) 連日の大雨、今日も尚止まず、風さへ吹き出でたれば洪水あるべしなど、噂こりごりなりしが、晝過ぐる頃より、案の外に霽れ渡り、洪水の沙汰は、水とともに流れうせ、折々、蟬の聲漏れ聞ねて、いとめでたし、夜は五日月、芋の葉にさやかなり。

(4) 田舍にては、都會の如き繁華もなく、又都會の如き便利もなし。されど、其生活の心安さと、その山水の眺の清きと、その人情の淳朴なると、その空氣の清爽なるとは都會に求めがたき寶なり。かの春の花見、わらび取り、秋のもみぢ、茸狩り、冬の雪見など、これまた、都會の人の深く羨む樂なり。

(5) 理想の砦、機智の濠、高く潔けき品性の城に籠りて獨立の氣象の旗を飜し、眼界廣く見渡せば、前途樂しき遠大の志望の海の彼方には、成功の波湧き起てり。

藤蔭師帥

四、次ノ讀方ヲ問フ。

樞密院。　出雲。　因幡。　天橋立。　嚴島。
松島。　後樂園。　栗林公園。　兼六公園。　總名。
縫模樣。　赤十字社。　藤席。　前歯。　驢馬。
助役。　名譽職。　師團。　巡洋艦。　通報艦。
抑へ。　惱ます。　嫁ぐ。　熟海。　鹹き。
同盟。　道筋。　常食。　丈夫。　月山。
天龍。　分流。　八丈島。　後志。　琉球。

牆壁礁。　虛弱。　造幣局長。　幼子。　脂。

第二節　書取

一、次ノ文字ヲ諳書シ得ルマデ習ヘ。

賞罰。　思召。　着物。　近江聖人。　測候所。
優勢。　皇居。　天祐。　保全。　葉。　吸物。
矯正。　推薦。　豆腐。　大根。　菓子。
果物。　訪問。　寒暑。　溫暖。　怪我。
土產。　物蔭。　座敷。　鴨居。　分泌。
經濟。　停車場。　教師。　官吏。　役人。

矯（ナカ）　矯（ナカ）
蔭（イン）　陰（イン）

二、次ノ意味ノ漢字ヲ書ケ。

(1) キウドウ（いっしよ）
(2) エンスヰケイ（まるみのかたち）
(3) シュウゼン（つくろい）
(4) ジュンクヮン（めぐり）
(5) トウメイ（すきとほる）
(6) トイシ（ものゝ名）
(7) セキエイ（ものゝ名）
(8) ヤタウムシ（虫の名）

共同。
圓錐形。
修繕。
循環。
透明。
砥石。
石英。
夜盜虫。

三、左ノ文字ニ片假名ヲ附セヨ。

社稷。　輿論。　漂渺。　埠頭。　咄嗟。
東大寺。　大使館。　常盤木。　大寶令。　院政。

第三節　綴方

一、次ノ文字ノ上若クハ下ニ他ノ文字ヲ附シテ、熟語二ツヅヽヲ作レ。

恩。　思。　指。　色。　守。　發。
兵。　產。　注。　往。　柱。　駐。

生玉　生魂

二、次の句の中にて誤りあらば正せ。

(1) 我等の藥み。

(2) いねの、まわりに、くわを、うゑたり。

(3) きのうは、生玉神社に、まいりたり。

(4) にはこりの、こねが、きこゑたり。

(5) いづれ日曜にはゆる〳〵御伺ひ申上げ候ふ。

(6) 萬障御操合せの上御光來の程奉侍候。

三、次ノ文字ノ字音ト意味トノ相違セル所ヲ問フ。

墓——暮。　買——賣。

功——切——巧。　枝——技——杖。

科——料。　池——地。

往——住——任。　塾——熟——熟。

四、左ノ文語ヲ口語ニ改メヨ。

(1) 巧ニ笛ヲ吹ク人アリ。其技ヲ傳フルニ曾テ拙キ師ヨリ學ビシ者ニハ二倍ノ束修金ヲ出サシメタリ。或人ソノ故ヲ問ヒシニ、人ハスデニ知レルコトヲ忘レントスルハ、未ダ知ラザルコトヲ學バントスル人ヨリモ難シト答ヘキ。誠ニ習慣ノ除キガタキハカクノ如シ。

(2) 臺北は、臺灣第一の都會にして、總督府のある所なり。市街は、支那風にして、周圍に城壁をめぐらす。城外の市街を合せて、人口、およそ、七萬餘あり。

五、次の文章を作れ。

(1) 秋の野山。(口語體)

(2) 松茸を贈る文。(書簡口語體)

第十三章

第一節　講讀

琴　楽

酋　尊

隣　憐

氷　永

慮

窃

一、次ノ文字ノ讀方ヲ問フ。

楽。　都　鄙。　酋長。　鼻。　酒屋。

別格官幣社。　不思議。　隣。　生蕃。　休憩。

鯛。　鰹。　鰯。　鯨。　蕎麥。

餓死。　氷山。　屏風。　輜重兵。　顯微鏡。

三位。　麥稈帽子。　地震。　油繪。　障子。

二、次の讀方及び解釋を問ふ。

殿堂。　樓門。　絶壁。　官衙。　平坦。

玻璃。　皮膚。　陶土。　牛乳桶。　握手。

波路。　驚嘆。　徒歩。　奔走。　觀察。

竊取。　彈丸。　美談。　放逐。　筒袖。

三、次の文章を讀め。

(1)　そのいへはほつたてごやのごとく、ゆかもなくてんじやうもなし。たゞかづらなどにて、かやをむすびてかべにかへ、またかやをならべてやねとなせり。をくないにはちうおうにゐろりをつくり、いつかこれをかこみてだんせうす。

(2)　せんにはちょくせんときよくせんとあり。ちよくせんをてきたうのながさにきり、いっていのまあひをおきて、あるひはたてに、あるひはよこに、あるひはなめにならぶるときは、うつくしきもやうをせうず。

四、次の文章の讀方及び符線の字句の解釋を問ふ。

(1)　海の靜かなることは鏡の如く、朝日、夕日を負ひて、島かくれ行く白帆の影ものどかなり。月影の小波にくだけ、漁火の波間に出沒する夜景も亦一段のおもむきあり。

(2) 翌朝警固の武士ども之を見つけて、何事を知何なる者の書きたるかと、讀みかねて上聞に達したり。主上は詩の心を御さとりありて、天顏殊に麗しく笑ませ給ひぬ。されど武士どもは其の意味を知らざりしかば、恩ひとがむることもなかりき。

點　点
省ミ　顧ミ

(1) 山。方。

(3) 公明正大ニシテ、心中一點ノ曇ナキモノハヨク笑フ。内ニ省ミテ、ヤマシキコトアレバ、勉メテ面ニ笑フトモ、心中ノ苦ヲ如何ニセン。ヨク笑ハント欲スルモノハ、常ニ其行ヲツヽシミ、上、天ニ恥ザズ、下、地ニ恥ザズ、外、人ニ恥ザズ、内、己ニ恥ザザル工夫ヲナスベシ。

第二節　書取

一、次ノ片假名ヲ漢字ニ改メヨ。

(1) ふとヤマのいたゞきのハウにすさまじいモノオトがキコえ始めたと思ふと、ヒヤクライのイチジにオちかゝったヤウなひびきと共に、ヤマのヤウなユキなだれがなだれてキて、むざんや、かのイサましいセウチンコシユはタチマちタニツコへはきオトされた。

(2) シヤウグンのアイシヤウによって、グンチウのハナがタスかったので、ゼングンイチドウにクワンキのコエをあげた。

(3) ジンセイ七十年と見るも六十萬ジカンにスぎず。其の内シンショク、ダンワ、イウギ、ヒヤウキ等のタメに費すジカンは三分の二をしめ、ジツサイシウガク及びゲフムに用ふるジカンはワズかに二十萬ジカンをコえざるべし。

物音。聞え。百雷。一時。落ち。樣。雪。勇。少年。鼓手。忽。谷底。落。

(2) 將軍。愛情。軍中。花助。全軍一同。歡喜。聲

(3) 人生。時間。過。寢食。談話。遊戲。病氣。爲。占。實際。修學。業務。僅か。越。

二、次ノ語ヲ漢字ニ改メヨ。

豪傑。
擲ツ。
行幸。
遵守。
考案。
舌。胸。肩。
鍋。釜。鉢。
棕梠。菊。
燕。鷄。雀。
熊。猿。猿。

(1) ガウケツ。(智勇人にすぐれたるもの)
(2) ナゲウツ。(なげること)
(3) ギャウカウ。(陛下のみゆきあらせらるゝこと)
(4) シュンシュ。(まもりしたがふこと)
(5) カウアン。(かんがへること)
(6) シタ。ム子。カタ。(身體の一部の名)
(7) ナベ。カマ。ハナ。(器具の名)
(8) シュロ。キク。(植物の名)
(9) ツバメ。ツル。スヾメ。(鳥の名)
(10) クマ。オホカミ。サル。(獸の名)

三、次の文字を平假名にて書け。

島嶼。　直徑。　旅團。　雄蕊。　造花。
粘板岩。　縣廳。　嗽草山。　唐招提寺。　竹藪。

樹林。　面影。　田畑。　雨具。　傘。
木像。　鐵道。　日曜。　御安心。　夢。

四、次の文字を諳書し得るまで書け。

寢覺。　花見。　誘ふ。　芝居。　拜啓。
衛生の道。　音信。　不沙汰。　電報。　如何。
世話。　奉書紙。　鍋。　釜。　水鉢。
權利。　義務。　長持。　簞笥。　戸障子。

第三節　綴方

一、左の文中漢字に誤あらば、其の字の左に正しき文字を書け。

(1) 彼ハ身ヲ犧牲ニス。
(2) 四邊ヲ疑視ス。
(3) 今日の春日和は、餘程暖かなれば、畫すぐる頃より一

家内打ちつどひ、野邊にて門を出づれば、大陽の光りうらゝかにして、島の聲四方に聞え、清神爽快にして身體もとみにのぶる心地ぞせし。野に出ずれば見渡す限り、緣したたるばかりに、苦草萌ゆ出で、遠山の麓、霞たなびきて、雲雀は空高く囀り、胡蝶は草花に戯れ狂ひ、いとものごけき春景色と、心も空になりて、妹とともに、草を摘み、兄とともに、駈けくらべなどをなし時を忘れて遊ぶ程に、母の歸りを促しければ、いざとて野に別れを告げしとき、山寺の鐘の音一つ二つ

二、次の文字を含む熟語を二つづゝ作れ。

役。　常。　用。　助。　供。　利。

形。　待。　推。　點。　戒。　同。

三、左の文題を作れ。

(1) 借用の書籍を返却する文。(書簡候文體)

(2) 初雪。(口語體)

第十四章

第一節　講讀

一、次の歌の意味を問ふ。

(1) さして行く笠置の山を出でしより、
天が下にはかくれがもなし。

(2) いかにせん頼むかげとて立寄れば、
尚袖ぬらす松の下露。

二、次の文意の讀方及び符線の字句の解釋を問ふ。

(1) 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、生徒も亦校長をしたふこと父母の如し。其の他の教員も校長を模範として職務に勉勵するが故に、兒

濕る
濡らす

懷く

徒に　戯

協　共

、童は皆よく之になつきて、學校を思ふ心厚く、卒業後も尙學校の門に出入するを樂みとせり。

(2) 進取の氣象に富める人は何事を爲すにも、此の事は必ず成るべしと覺悟して、熱心に其の事に從ふを以て、成功は期せずして到る。引込思案の人は徒に其の結果を思ひわづらひて、優柔不斷其の事業に取掛らざる中に、良好なる時期を失ふこと多し。快活なる精神を以て熱心に其の事業に從事せば、天下何事か成らざるを憂へん。

(3) 帝國議會の協贊は國家の盛衰國民の安危に重大なる關係を及すものなれば、議員たる者は至誠奉公の赤心を以て忠實に其の職責を盡すべく、一般選擧人も亦公平無私の精神を以て參政の公職に最も適任なる人

胄　捐　座　只

(1)自治。精神。地方人民協同一致地方公共。誠意。團體

物を選出せざるべからず。

三、左ノ熟語ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

用意萬端　扶翼。優勝者。追賞。

甲胄。慘憺。洗面器。風俗矯正。

義捐金。波止場。面影。配置。

要路。脅迫。安座。幣帛。

調度。只管。領海。寡婦。

蹉跌。上首尾。

第二節　書取

一、次の片假名を漢字に改めよ。

(1) 何をかシナのセイシンといふ。ナハウジンミンケフドウイツナして、自らナハウコウキョウの事に任じ、セイイ其のダンタイの爲に力を致すのセイシンなり。

(2)倹約。大切。人情。義理。情。弊。身分相當。交際。家。保必要。親類。縁者。慈善。事業。應分。資。公共。事業。遇。

(2) ケンヤクを守るはタイセツなれども、ニンジヤウにそむき、ギリに外れても、費用をチシむはイヤしむべき事なり。ミブンサウタウのカウサイはイヘをタモつ上にもヒツエウなり。シンルイ、エンジヤはもとより、世間のカウサイをも外さず、ジゼンのジゲフにもオウブンのシを投ずべく、コウキヨウのジゲフにもオクれを取るべからず。

二、左の文字を諳書し得るまで書け。

課程。困難。感佩。啓發。散在。
私塾。弊害。圓。錢。危機一髪。

三、次の漢字を平假名にて示せ。

範圍。準備。德化。春秋。恭儉。
奪略。行動。感奮。官位。機關。

操(あやつる) 繰(くる)
乱す(みだす) 紊す(みだす)
固く(かたく) 堅く(かたく)

宗教。狀況。舉止。緣故。强制。
勸誘。議員。增進。親裁。互選。

第三節　綴方

一、次の文章を口語體に改めよ。

(1) 我が國は氣候溫に、地味肥え、極めて耕種に適し、米、麥の栽培は最も早く開けたり。古來瑞穗の國の名ある所以なり。

(2) 是等の人々は皆非常の大事にあひて心を取亂さず、能く其の處すべき道に處したる我が國婦人の實例にして、其の志操の固きは男子にも勝れり。

二、次ノ文字ノ字音ト文字ノ意味ノ相違セル所ヲ問フ。

投――菅。　沒――投。
共――供。　識――職。　織――洪。

理――埋。　穀――殼。
講――媾――溝。　霜――雪――霧。
瓜――爪。　牧――枚、
水――氷――永。　項――頃――傾。

三、次の文題を作れ。

(1) 恩師に入學試驗の模樣を知らする文。(書簡候文體)

(2) 父母。(記事體)

第十五章

第一節　講讀

一、次ノ語ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

蜚固。　緩急。　淵源。　無窮。　恭謙。
統治權。　協賛。　禽獸。　追擊。　乳呑子。
煙突。　運搬。　軌道。　諮詢。　審議。

遁る　遁る
克ク　能ク
固ト　素ト
麾ク　旗ク

二、次の文章の讀方及び全文の意義を問ふ。但し附線の字句は特に解釋すべし。

(1) 上毛野形名、蝦夷を討ちて利あらず、兵皆四散せしかは、夜に乘じて城をすてゝ逃れんとす。形名の妻、夫を勵まして、「良人今獨り身を全うして、祖先以來の勇名を辱しめ給ふか。」と自ら劍を帶び侍女數人と弓を取りて盛に弦を鳴らせり。賊之を聞きて、城中兵尙多からんと思ひ、其の夜圍を解きて去れり。

(2) 我ガ聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、一ニ天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラズ。殊ニ我ガ軍ノ損失、死傷ノ僅少ナリシハ歷代神靈ノ加護ニ依ルモノト信仰スルノ外ナク、嚮ニ敵ニ對シ勇進敢戰シタル麾

下將卒モ皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ極言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。

三、次ノ文句ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

(1) 大イニ荒地ヲ開キ、美田ヲ增スノ必要アリ。

(2) 農ハ人ノ職業中最モ健全、最モ高貴ニシテ、又最モ有益ナルモノナリ。

(3) 同一國民ノ嗜好ニモ亦時々ノ變遷アリ。故ニ商業ニ從事スルモノハ常ニ花客ノ嗜好ヲ考ヘ、流行ノオモムク所ヲ察セザルベカラズ。

(4) 其ノ炭坑ハ炭層厚ク、炭量亦豐富ナリ。

(5) 少壯有爲ノ間ニ徒ニ遊ビ暮サバ、老イテ後悔ユトモカヒナカルベシ。

(6) 疏食ヲクラヒ水ヲ飲ミ肱ヲ曲ゲテ之ヲ枕トスルモ、樂ミ亦其ノ中ニ在リ、不義ニシテ富ミ且貴キハ我ニ於テ浮雲ノ如シ。

嗜 疏 粗

第二節 書取

一、次ノ片假名ヲ漢字ニ改メヨ。

(1) シンシユのキシヤウにトむ。

(2) チツシンにこのセツをシユチヤウす。

(3) ブシダウのセイクワをハツキす。

(4) ヒンカクをソナへざるべからず。

(5) チンはナンジラのチユウレツによりソソウのシンレイにコタふるをウるをヨロコぶ。

二、次の漢字を平假名にて示せ。

(1) 將、卒。感泣。捕虜。無慮。

(2) 盤木。龍骨。肋骨。工廠。

(1) 象。進取。氣

(2) 主張。熱心。說

(3) 精華。武士道。發揮

(4) 品格。儲

(5) 忠烈。朕。汝等。禮宗。神靈。答。得。喜。

肋 助

粉
紛

(3) 花粉。植物。食物。銀杏。
(4) 建長寺。笹子峠。芭蕉。木曾。
(5) 棟木。漢詩。香爐峯。甘藷。

三、次の文字を諳書し得るまで之を習へ。

近狀。報知。拜具。聯隊。酒保。
販賣。講談。周密。感謝。課業。
教練。平素。勞働。術科。居室。
點呼。寢具。消燈。無音。規律。

第三節　綴方

一、次の文章を記事體に改めよ。

(1) 畑には麥がもう一寸程にのびてゐる。それと隣り合って、ねぎや大根が青々とうねをかざって、こゝばかりは冬を知らないやうに活々とした色を見せてゐる。畑

紳
坤
神

に續いて、農家が一けんある。霜にやけて赤くなった杉垣の中には、寒菊が今を盛りと咲いてゐる。物置の後には、大きなだい〳〵の木があって、黃色い大きな實が枝もたわむ程なってゐる。

(2) 木蔭に立ってつく〴〵と此の樣子を見てゐた一人の紳士があった。づか〳〵と走り寄って、「ちよつと貸したまへ」と言ひながら、其のバイオリンを取って彈始めた。弓が一度絲にふれると、天上の音樂の樣な美しい音がわき出した。老人はどうしてあのバイオリンから、あんな音が出るか、どうして又自分の彈く時にはあんな音が出ないのかと不思議さうに、バイオリンと紳士の手つきを打ちまもって居た。

二、次の文題を作れ。

(1) 馳走になりし禮狀。(隨意)

(2) 日日のつとめ。(同上)

第十六章 (綴方作例)

第一節 書翰體

◎中學校に入學したることを兄に知らす文

よほど暖かになりましたが、兄上樣には御無事で勉强してゐらっしやるさうで、なによりのことゝよろこんでゐます。當方も、御兩親樣はじめ、一同何のさはりもなく、くらしてゐますから、御安心下さい。さて私事も去る三月には尋常小學校を卒業いたし、直ちに當地中學校に入校いたさんものと、願書を差出し置きましたが、何を申すにも入學志願者が多いので、どうとう選拔試驗を行はるゝことゝなりましたので、一時は心配いたしましたものゝ、さて落膽ばかしもしてをられませんから。日夜勉强いたしました結果、選拔試驗も首尾よく及第つかまつり、いよ〳〵入學を許可いたされましたし、すでに洋服も敎科書も、すつかり買っていたゞきましたから、どうぞ御安心して、さうしてよろこんで下さい。これからは小學校とはちがい、一足飛びにむつかしくなりますさうですから、一しやうけんめいに勉强いたすつもりでございます。まづは右お知らせいたします。

◎入學試驗期日を問合す文

寒かつた冬も一日一日に薄らぎ行き、追々好い時候となりますが、御きげんよく益御勉强の事とよろこんでゐます。私しも、もはや當地高等小學第二學年を終らんといたしますので、來る四月からは、御地の中學校へ入學いたしたく、既にその準備にとりかゝり、一生懸命になつて勉强いたし居り

ます。就ひては、入學試驗期日はいつ頃でありますか、實は受驗のために參るべき仕度もありますことで、心配になつてたまりませんから、若しお分りになつて居りますれば、誠に御手數では御座いますが、ちよつご御知らせ下さいませ、お賴みいたします、左樣なら。

◎運動會のあんない狀

よほど、しのぎよくなりましたが、貴君も無事で、日日御通學なさるさうで、何よりも結構だとよろこんでゐます。さて、今週の土曜日には、私どもの學校内で、大運動會を開くことになりましたが、今年はいつもとかはつて、ずゐぶん奇拔なしゅかうも有之、それには、いろ〳〵おもしろいのがたくさんありますから、ぜひ御見物にいらっして下さい、きっと待ってゐますよ。しかし當日が雨天であったならば、來週の土曜日に延ばす筈ですから、左樣御承知下さい。先は御案内まで、左樣なら。

◎遠足に友を誘ふ文

春暖日に日に相加はり、最早郊外は花笑ひ鳥歌ふの好時節となつたが、貴兄は相變らず書物と親しんで、内にばつかり閉ぢこもつて居るだらうが、それでは、却て身體の健康を害するのみならず、百花らんまんの好季にさいし、いたづらに見のがすは、宜ろしからんことゝ思ふから、幸ひ來る日曜日を期して、一日の清遊を嵐山に試みたら、どうだか、實は彼の地の友人からも有名なる櫻は今頃が見ごき故、是非來る樣に申し越しあるから、雨天ならざる限りは、必らず行くことにしやうじやないか、免に角君の返答次第で、その他の準備を打合すことにしやう、先は右御誘ひまで左樣なら。

◎借用の書籍を返却する文

拜啓御大切の萬國地圖長らく借用致し、千萬有難く存じ候。御蔭を以て、都合よく勉强も相出來候ことゝ深く御親切の段感泣致し居り候。就ては拜借中、なるべく大切に心がけ候ものゝ、少々損所も相出來候たん申わけも無之候。こもかく一應お返し申し上げ候間御受取下され度候。先は御禮申上候也。

◎暑中見舞の文

夏とは申しながら、本年の暑さは格別に相嚴しく、さながら釜中にありて、今にも溶けんかとまで疑はれ候昨今、あなた樣には御一同樣何のおさはりは御座なく候哉伺ひ上げ候。私方は幸ひに、皆々無事に相暮らし居り候、ことに私と弟とは、最も元氣よく毎日通學致し居り候間、何卒御安心下され度候。先づは暑中の御見舞申上げ候

◎病氣見舞の文

拜啓、承り候へば貴兄には先日より御病臥の由、誠に驚き入り候、實は此の三四日引續き御欠席相成居り候に就ては、平素の御勉學に似合はざることゝ折角不審に存じ居り候故その中一度は御樣子伺ひのため參上致べき心組に御座候次第、失禮のだんは何卒不惡御思召し下され度く候、この上は學業より身體こそ大切と存じ候故、學校の方へは御心配無之、充分御療養の程肝要にて、一日も早く御全快祈り上げ候、雞卵は常から貴兄の好物にもあり、旁、些少ながら御見舞の印迄に、呈上仕り候故御受納下され度、何れ參堂致すべく候へ共、先はとりあへず御見舞までかくの如くに御座候不一。

◎松茸を贈るに添ふる文

朝夕は、よほど涼しくなりまして、大分しのぎよくなりましたが、お變りはございませぬか。さて、昨日田舍の親戚より、今年の初ものだといって、松茸を送り越し呉れましたから、まことに少しばかりでは、ございますが、おすそわけをいたします。

◎祭禮に人を招く文

拜啓來る十日は例年の通り、當村の氏神祭禮執行いたされ、晝は競馬角力の催し、夜は花火なども打ち上げられ候由にて、餘程賑はしきことゝ存じ候間、何の御馳走も無之候へど、みなみな樣打つれて御こし下されたく待上候。

◎馳走になりし禮狀

一昨日は、大ぜい參りました上に、いろいろと御馳走下さつて、まことに有難く御禮申上ます。久しぶりにて面白き見物いたし、その上に厚いおもてなしになったのだから、歸ってからでも、一同かぎりなくよろこんでゐます。いづれお目にかゝつて尙萬々御禮を申上ます。左樣なら。

◎恩師に入學試驗の摸樣を知らする文

拜呈仕り候、偖て、兼々思ひ立ち居り候入學試驗も愈昨日を以て全部終了致し候間先づ以て御安心下され度く候、此度の試驗は志願者五六百名との事に候ひしに、實際は甚だ多く、凡そ八百名も有之益責任の大なるを相さとり申し候、私は三百四十五番にて第二試驗室に入れられ候處、恰も吾が校の者と二三番離れて着席仕り大層都合よく御座候、試驗は二日間にて前日は讀方と算術有之二日目に綴方書方の順序にて施行せられ候、各科とも幸ひに先生の厚き御教示

に預り候事とて案外みやすき心地仕り、此の分なれば、八百名中募集定員二百名の内へ入らるべきかと心窃かに喜び居り候、これことごとく先生の御かげと存じ厚く御禮申上候、何れ二三日の後には花々しく歸鄉仕りその上にて尙詳しく申上度く、先は取りいそぎ模樣御報知迄如此御座候頓首

第二節　記事體

◎梅

梅は、百花に先だつて、獨り雪中に花を咲かし、その清香を放つに依て多くの人々に愛翫せらるその。花は白色單瓣のもの多く、その他、紅梅、黃香梅、銀梅等十數種あり、何れも、優美にして人に觀賞せらるゝのみならず。五月頃に至れば實を結びて、人の食用となる。之れを梅干と稱して廣く一般に供用せられ益する所甚だ多し。斯くの如く、花實共に賞せらるゝものまた他に無し。宜なるかな、松竹の常盤を變へざるに比し、松竹梅と人々の呼び稱ふるを。

◎蚕

蚕は、春と秋との二回かへりて、繭を結ぶものなり。始め、蚕卵紙よりかへるや、桑の葉を食して、四回眠り、後一週間餘にして自ら巢をつくる、これを繭と云ふ。生絲はこの繭より製したるものにして、我が國物産中最も重要の位地を占め、外國輸出品中第一の金高を得らる。此の蚕の如きは實に國の爲め有益なる義虫といはざるべからず。

◎朋友

勅語にも、朋友相信じとあれば、友人間は互に親しく交らざるべからず、然れども、水は方圓の器にしたがひ、人は善惡の

友によるといへば、よく〳〵その善惡をえらばざるべからず。善き友は互に惡しきをいましめ、難儀を助け、善をすゝめ學を研き、終始かはらず異身全体なるべし惡しき友は、なるべく親しからざる樣に交り、事毎に排斥するをよしとす。然るに、益ある友は、すべて父母兄弟に次ぐ相談相手ともなりぬるを、兎角きらひて遠からんとするは、大なるひがごとゝいふべし。

◎夕　立

西の空、黑き雲の起るよと見る間に、はやくも一天を蔽ひぬ。風鈴の短冊は、ゆらめきさへ見せず、庭の木の葉も眠りたらんが如し、をりしも一道の稻妻、閃きたりと見るや否や、おどろおどろと鳴り出す鳴神、さながら萬雷の一時に落ちたるが如しとは、よくもいふたるものよと人人感じつゝも耳を蔽ひて、ヒタと寄り添ひぬ。

やがて、サット降り來る大雨は、横しぶきの雨戸を閉める間さへなし、アナヤと思ふ間に、其處ら一面はビショ濡れに濡れ渡り、しばらくは、雷の音、雨の音、風の聲より外には何の音も聞くに由なく、目に入るは稻妻の凄き光のみ。

かゝるうちに、雲はしだいに破れて再び青天井をあらはし、サッと吹き來る一道の清風は天地萬木爲めに生き返りたるが如く、人人蘇生の思ひしたるも實にもっともといふべく、夏の夕立はさてもうれしきものよ。

外を眺むれば、今の大雨にて破られたる網を修繕せばやとて、蜘蛛の大急ぎにて活動するあり、耳をすませば聲を收めたる蟬の、一齊に勢ひよく鳴き出したるも心地よし。

◎父　母

父母は吾等を生み吾等を育てられたる者にして、その恩は海よりも深く、山より高く天地間にたとふる物なし。然れば父母に孝養を盡くすは、人間の第一行爲にして、古語にも孝は百行の基とあれば、吾等は精神誠意を以て、父母に仕へ、鴻恩の万分の一に酬ゆる心掛なからざるべからず。

◎雪

水蒸氣、空中に昇りて、寒氣にあひ、雲となり、いまだ、雨とならざる前に、急に、一層の烈しき寒氣にあへば、つひに凍りて雪となるなり。雪は、こまかく調ふれば、みな美しき形を保てり。六角形のもの、六本の羽を組み合せたるごときもの、など、種々の形あれども、いづれも、六つの形ならざるはなし。ゆゑに、昔の人は六っの花などゝもいひて盛んに歌などにうたひたるものなり。

第三節　口語體

◎春

春は四季の始めでありまして、昔は暦と合はせたもので一月を初春と稱へましたものです。然れども現今では大概、三月から五月頃までを春と申します。この時分は、四季中最も時節の麗かなもので、また最も陽氣な好い折柄であります寒かつた冬の後をうけて、万物盡くよみがへり、草木も新芽を吹きますから、從て、野山は滿開の花で、ひとしく美事に飾られます、若し、天氣朗かな日に乘じ、郊外などを漫歩きいたしますと、誠に何ともいへない心持ちで、樂しく遊ぶことが出來ます。しかしながら、私どもはまた最も大切なる時でありまして、一年中の最難關なる學年試驗も入學試驗も皆この頃でございます。

◎海國男子

我れ等が住むで居る大日本帝國は、四面が海に圍まれてをるから、いづくへ行かうにも船より外に道がない。かゝる海國にて生れし日本男子は、國のため進んで海を家とするの覺悟が必要である。此の覺悟ありてこそ、始めて海國男子の本領を發揮することが出來るのである。かゝる習慣を養ひて、大波も恐れぬやうになるには、幼きときからの練習が一番で、泳ぎの業も、船漕ぐすべも、絶えず怠らぬ心掛けをもたねばならぬ、

◎公　園

公園と申しますのは、公共事業になつたもので、一般のため設けたものですから、人々は、茲處を自分の庭園とも心得て朝な夕なに樂しく散歩することが出來ます西洋では、早く

から万事が整ふて居ましたから、隨分設備のよゝなつた、立派な公園が多いさうですが、吾が國では、未だそこ迄は參りません。しかし、昔から有名なのは、岡山の後樂園、金澤の兼六公園、高松の栗林公園でありまして、之れを日本の三公園と申しますが、その他にも東京の上野公園、奈良公園、等著名なものであります。我地の公園も、昔しの城址でありまして、中央には天主臺が殘つて居まして、老杉古松あたりを蔽ひ、四時の眺めも殊に勝れて居ますから、集まる人の絶え間がありません。

◎秋の野山

金もころげるかと思はれた暑さも、いつしか過ぎ去って、今ではやかましく鳴いてゐた蟬の聲も、まったくなくなってしまった。なるほど一年のなかばは過ぎたので、今さらさう

思へば何となう、さびしい心地もする。しかし、暑からず寒からずの氣候で、柿の實は、赤く色づき出す、いろいろの草花は、ふたゝび野山をかざり、木の葉色づいて錦をかざる景色は、春のながめにもおとらない美しさである。

それぱかりか、廣々とした田圃には、稻が一面に黃色に熟して、そよそよと吹く秋風に、黃金の波をうつてゐるのもうれしい心地がする。それから、夜に入ると、清くすんだ月が、天上にかゝり、鳴く虫の聲草むらに聞こゆるなど、實にこの世の外に出たやうな心地がする。

◎讀書のたのしみ

讀書は、未だ見聞せざることを、廣く知るばかりではなく、古今の英雄豪傑や聖人學者等と、親しく交つて恰も敎へを受けられる樣な利益があります。されば、私は常に讀書の愉快を感じまして、いろ〳〵な新刊雜誌や書物を集めては、樂しく讀んで居ります。いたづらに、無益の遊戯にふけつて唯ぶら〳〵と暮らすより、なんぼう利益で面白いか分りません。しかしながら、書物の撰擇をあやまつては、かへつて不利益となりますから、之れはよく〳〵注意せんといけません。私は、多くの書物の中で、最も好んで居りますのは、古今の人物傳やら立志談でありまして、讀みながら、覺えず知らず、泣いたり笑つたりすることが度々であります。

◎衛　生

衛生とは、日常の座臥居住について萬事淸潔を貴ぶことを申します。昔し野蠻の時代などにありましては、斯樣にやかましいことはなかつた樣でありますが、追々文明となり開化となるに從つて、世の中は次第に複雜となり、人口も稠密

となりますから、第一にこの衛生といふことを重んじ守らねばなりません。彼の恐ろしき傳染病やら其他の病氣なども、皆之れを疎かにするから起るので、誠に大切なものであります。現今、公共事業として、上水道やら下水道が出來て、井戸の水がやかましくなつたり、蘆芥をむやみに捨てる事が出來んなど、皆公衆衛生の爲めで、最も肝要なものであります。そのほか、個人の衛生としては、常に掃除を嚴重にして、汚物をためぬ樣に心掛け、衣類身體の清潔を貴びて洗濯入浴を缺かさぬ樣、又、夜具寢卷等の寢具は時に日光にさらすなど、十分に注意せねばなりません。

第一編終

第二編　算術科

第一章

◎第一位、第二位、第三位、第四位、第五位……の數といふことを、それぞれ、一の位、十の位、百の位、千の位、一万の位……の數といひ、ふつうに桁といふことあり。

(1) 第二位の數と二位の數との區別を問ふ。

〔解〕第二位の數とは、十の位の數のことにして、即ち、十、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、九十の九つの數のことなり。又、二位の數とは、十の位の數と一の位の數よりなる數のことにして、十に始まり、次第に一つづゝ足したる數、即ち、十一、十二、十三、十四、……九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九までの數のことなり。

(2) 第三位の數、第四位の數とは如何。

(3) 第三位の數、第四位の數にて最小なるものと最大なるものとを擧げよ。

(4) 五位の數、六位の數とは如何。

(5) 三位の數の中にて最小なるものを問ふ。

(6) 四位の數の中にて最大なるものと最小なるものとを示せ。

(7) 次の數の中にて第四位の數は何なるか。

2468, 795008, 605007, 9243

(8) 次の數は何位の數なるか。

27, 536, 9000, 857245

(9) 次の語の定義を語れ。

整數、小數、帶小數、名數、不名數。

〔解〕整數とは、一及び一の集りよりなる數にして、例へば一、五、七、十二、百六、四千二百六十九、十二万五千三百五十四の如し。

小數とは、一の十分の一、百分の一、千分の一、一万分の一、……

◎一の十分の一を分、百分の一を厘、千分の一を毛、万分の一を絲、十万分の一を忽といひ、分、厘、毛、絲、忽を、それぞれ、小數、第一位、第二位、第三位、小數第四位、小數第五位、或は分の位、厘の位、毛の位、絲の位、忽の位といふ。

……を單位としてかぞへたる一より小なる數のことにして、例へば、八分、四分三厘五毛、七絲六忽、九分五絲の如し。

帶小數とは、整數と小數とよりなる數にして、例へば、二十五個九分二厘、三ト九分三厘、四十個二厘九毛、百五ト九厘八毛八忽の如し。

名數とは、數に單位の名を添へたるものにして、例へば、十五人三十五斤、九十八圓五十錢、三貫三百四十五匁六分などの如し。

不名數とは、通常の數、即ち、數に單位の名を添へざる數にして、例へば、八十九、百三十五、三分六厘五毛、六十個二分八毛五忽などの如し。

◎單位とは物をかぞへるときの目當をいふ。例へば十五圓は二十八人は一人を單位とするが如し。

(10) 次の數の中、整數と小數と帶小數とを見出せ。

百二十八、六千五百八十、三十五万四千二百九十七、八分二厘三分、九絲、二毛六忽、三分九厘四毛六絲、五個八分九厘、二ト五分八厘三毛、七十五個八毛四絲

5924,　36.8752,　90000,　0.4265,
973.24,　0.0052,　0.59305

第二章

(1) 數の唱へ方とは如何。

〔解〕 進かの言葉を組合せて、如何なる數にてもいひ表す方法なり。

(2) 24567を讀め。

〔解〕 右端の數字より左方に、一、十、百、千、一万と呼び登りて位取りをすれば、左端の位は一万の位なるを以て、24567は二万四千五百六十七なり。

(3) 帶小數の讀方を問ふ。

〔解〕 帶小數を讀むには、整數部と小數部との間に個或はトといふ言葉を挿みて讀むものとす例へば、45.624は、四十五個六分二厘四毛或は四十五ト六分二厘四毛と讀むが如し。

(4) 次の數を讀め。

◎數字とは1234567890及び0の十個の記號をいふ。

2468854,　945.36　204050000,
74.256,　0.28546　0.0032

(5) 次の數を通常の言葉にて讀め。

285.5錢　74.862圓　55半　524.8升
427畝,　89.6段　5.3貫　42567人
5.48尺　296.8寸　0.5斤　4.5斤

(6) 次の數を數字にて書け。

十五万二千三百六十四、百八十四万八千五百九十九、四億三千四百九十五万三千六百六十九、二十億三千四百二十二万五千六百四十、八百九、五万二千五百、三分五厘九毛、六分五絲、十八個九分二厘三毛五絲、六十八ト三分五毛八忽、二百個九厘五絲

(7) 次の數を通常の言葉にて言ひ表せ。

24.7億　0.456億　0.4268547兆

17.265兆，126845万，24.584千

(8) 次の數を縱書せよ。

十八万二千四百九十五、三十九億四千二百六十八万五千九百二十四、十八個九分九厘七毛五絲、八ト九分四厘三毛八絲、二分七厘五毛三絲、九分三厘六毛五忽

(9) 次の數を讀め。

一二三四五六七八、八五四二〇六〇五、

三七五九〇二九〇〇〇、四九〇二三五七五〇〇八八、

三三・六二四八、九五・三六八九、三〇・三三三三三

〇・二四三五、〇・五九八五八、〇・〇〇五〇五

(10) 次の數を棒讀みせよ。

25689　85.4268　0.4259

◎棒讀みとは、與へられたる數の位の名を唱へずに單にその數字のみを呼び續ける方法なり。

(11) 次の數を數字にて書け。

三六二四五八六、一〇〇〇六〇〇八、〇・五二三八

〇・三五六九、八五四二・六三五五七、〇・二四二四五

(12) 次の名數を各其の附記する（　）の單位にて示せ。

29石(升)　423.6錢(圓)　75642.57貫(匁)

75.24段(町)　0.425町(畝)　5.68尺(分)

第三章

(1) 和とは如何。

(2) 次の各題の數の和を求めよ。

(イ) 2469,　84296,　54675　923677

(ロ) 0.5249,　0.4568,　0.74682,　0.92453

(ハ) 75.864,　77.2465,　52.43807,　0.84295

◎和とは二ツ以上の數を寄せ集めたる結果にして、和はしめ、高、計、合計、總計などともいふ。

〔解〕

(イ)

```
   2469
  84296
  54675
+ 923677
 1065117
```

答 1065117

(ロ)

```
 0.5249
 0.4568
 0.74682
+ 0.92453
 2.65305
```

答 2.65305

(ハ)

```
  75.864
  77.2465
  52.43807
+  0.84295
 206.39152
```

答 206.39152

(3) 次の各題の和を求めよ。

(イ) 524368, 593674, 524367, 924567, 543627.

(ロ) 0.8546, 0.742965, 0.64757 0.857642, 0.596666.

(ハ) 12.45245, 3.95427, 50.62474 20.95959, 45.64589

(4) 次の各題を計算せよ。

(イ) 185圓＋246圓＋7842圓＋924圓

(ロ) 1.567貫＋7.524貫＋5.946貫＋7.524貫

(ハ) 18丈＋12.5尺＋3.45寸＋1367寸

(5) 被減數、減數及び差とは如何。

(6) 次の各題の結果を求めよ。

(イ) 754268－98542

(ロ) 18.4657－8.9458

〔解〕

(イ)

```
  754268
－  98542
  655726
```

答 655726

(ロ)

```
  18.4657
－  8.9458
   9.5199
```

答 9.5199

(7) 次の各題の結果を求めよ。

(イ) 34524968－7456828

(ロ) 0.45637－0.35768

は結果さる減なる數よりも餘りを得ひ、數ていさ引小なる數を減小を減ふ或る引數な被大去る數

はふらずるこ。これは能加

同じ種類の名數には

計算順序は◎能はれのとも◎左右方及び括弧の中の式は左から右へ進むこと

(ハ)　25－7.59246

(8)　次の各題の結果を求めよ。

(イ)　94285圓－84699圓

(ロ)　31.245丈－7.888丈

(ハ)　2貫－354匁－75匁－1貫350匁

(9)　次の各題を計算せよ。

(イ)　250＋894－2.679＋0.089－954

(ロ)　4524－3599＋64998－7588

(10)　次の結果を求めよ。

(イ)　89.6－(3.089－2.16)＋(3.435－0.09)

(ロ)　18.376＋{(4.06－2.48)－1.35}－(14－13)

(ハ)　987.6＋{(346－273)－4.5}

(ニ)　90.4－25.3－{(24－0.3)＋7.5}

第四章

計算の部すべて◎計算ものの括弧は丸括弧を始め括弧の中は括弧の中の括弧は括弧の中の括弧

(1)　被乘數、乘數及び積とは如何。

(2)　次の各題の積を求めよ。

(イ)　52368×9　　(ロ)　5238×700

(ハ)　54353×768　　(ニ)　43200×185000

(ホ)　45376×5.584　　(ヘ)　4.2456×0.007

〔解〕

(イ)

```
  52368
×     9
 ------
 471312
答 471312
```

(ロ)

```
   5238
×    700
 -------
 3666600
答 3666600
```

(ハ)

```
   54353
×    768
 -------
  434824
 326118
380471
 --------
 41743104
答 41743104
```

(ニ)

```
   43200
×185000
 --------
   2160
 3456
 432
 ----------
 7992000000
答 7992000000
```

（ホ）

```
  45376
×  5.584
 181504
363008
226880
226880
253379.584
```

答　253379.584

（ヘ）

```
  4.2456
×  0.0074
 169824
297192
0.03141744
```

答　0.03141744

〔注意〕小數と整數或は小數と小數とを掛け合はするには小數點の位置に構はず、普通の掛け算の如くして積を求め、積の小數部の桁數を乘數の小數部桁數の和に等しからしむればよし。即ち本とくとの如し。

(3)　次の各題の結果を求めよ。

（イ）950847×8　　（ロ）7362×9547

（ハ）275×9000　　（ニ）43.524×9500

（ホ）43720×1000　　（ヘ）0.45429×10000

商九法しも除除と乙をと數◎名數は數被ね數は於◎
さるに て、數數い數被きに甲數と積な乘ば で常け掛
い結て、ふはひ を除、て數な同はる數なにるけ
ふ果割實。法實、除數甲割をり羅被とがらけ不乘算
。をりを而と 被數、數る乙。の乘き名ぬれ名數に

(4)　次の結果を求めよ。

（イ）4756圓×582　　（ロ）143.58貫×125

（ハ）8.48尺9.8　　（ニ）27300斤×0.059

（ホ）0.3石×0.085　　（ヘ）7.5里×75

(5)　被除數（實）、除數（法）及び商とは如何。

(6)　次の各題の結果を求めよ。

（イ）423621÷9　　（ロ）452.3÷7

（ハ）937365÷247　　（ニ）4697.68952÷8796

（ホ）875÷0.025　　（ヘ）20.354÷7.43

〔解〕

（イ）

```
9)423621
   47069
```

答　47069

（ロ）

```
7)452.3
   65.3.....0.2
```

答 { 商 65.3
　　 餘 0.2

〔注意〕與へられたる數を整數にて割るとき、商の左端の數の位は、第一部分實例へば、イの42の如き)の末位(42の2は一万の位)の位と同じ位なり。

(ハ)

```
247)937365(3795
    741
     1963
     1729
      2346
      2223
       1235
       1235
          0
答 3795
```

(ニ)

```
8796)4697.68952(0.53407
     43980
      29968
      26388
       35809
       35184
        62552
        61572
          980
答{商 0.53407
  餘 0.0098
```

(ホ)

```
0.025)875
25)875000(35000
   75
    125
    125
      0
答 35000
```

(ヘ)

```
7.43)20.354
743)20354.(2.7
     1486
      5494
      5201
       293
答{商 2.7
  餘 0.293
```

即ち、

即ち 餘 = 29.3 ÷ 100 = 0.293

◎實と法とに同じ數を掛けても商は變らざるを以て、小數或は帶小數にて割るときは、實と法とに、10、100、1000……の如き數を掛けて法を整數となし、割り算を行ふものなり。

〔注意〕與へられたる數を、小數或は帶小數にて割るときには、實と法とに同じ數を掛けて、法を整數となして割り算を行ふものとす。即ち、前題のホには千を掛け、ヘには百を掛けて法を整數となし、後ち、割算を行ひたり。ヘの如く、割り算をなして、餘あるときは今掛けたる數にて、この餘を割りたる結果が實際の餘なり。

(7)　次の割り算を行へ。

(イ) 216398÷7　(ロ) 6705.54÷9

(ハ) 700340÷6　(ニ) 915.73÷5

(ホ) 276672÷352　(ヘ) 6263.7377÷1453

(ト) 3457260 3÷2942　(チ) 3463.45÷473

(リ) 1885336÷74.08　(ヌ) 2766078÷0.3045

(ル) 536.28÷1.23　(ヲ) 30.71÷0.37

數てと實な名はと不に◎
な商名はる法數實き名し實
りは數法さがなさは數てが
。不にさき名り同、な法名
名し同は數。じ商るが數

(ワ) 9·36÷1·48　　(カ) 23·45÷0·246

(8) 次式の結果は如何。

(イ) 364斗÷0·5　　(ロ) 250·5圓÷1·45

(ハ) 60750貫÷27貫　　(ニ) 417尺÷2·78尺

(ホ) 18貫÷120貫　　(ヘ) 37·4斤÷250斤

(9) 次の各題を計算せよ。

(イ) 3781×3782×3783

(ロ) 65·65×67·86×989·8

(ハ) 8500÷4÷5÷40

(ニ) 21·95424÷2÷3÷6÷8÷9÷7÷11

(10) 次の各題の結果を求めよ。

(イ) 475−135÷5+23×24

(ロ) 10·1007÷2·9+42·6×7−100

(*) 300匁
40
0.04貫＝1500
1.5　貫＝1840匁

るちにはて單種◎
も、道同ゐ位類名
の計しじるがに數
と算て單と異ては
すす後位きつも同

(ハ) 7·22−2÷(2·6−1·6)+0·15×1·2

(ニ) 〔1000−(384+495÷3)×8〕×7÷56−11×3

第五章

(1) 次の各題の和を求めよ。

(イ)
3476円
7509
+2334

(ロ)
3·207圓
9·45535
+18·0605

(ハ)
48·05丈
3·204
4·3726
9·15
+30·6

(ニ)
1·4682貫
0·9947
29·0008
0·0033
+0·5269

(ホ) 300匁＋0·04貫＋1·5貫＝?

(ヘ) 7·8斗＋5·6石＋9·3升＋2·004石＝?

(2) 次の各題の差を求めよ。

(イ) 7·3石6·9638石　　(ロ) 9423圓−7368圓

(ハ) 20圓−530錢−2·4圓−200厘＝?

(ニ) 4貫－1500匁－1.23貫－35.26匁＝？

(3) 次の各題の積を求めよ。

(イ) 500圓×83　　(ロ) 2093貫×409

(ハ) 50尺×3.1416　　(ニ) 13.59錢×307×60

(4) 次の各題の結果を求めよ。

(イ) 370圓÷5　　(ロ) 9648人÷4人

(ハ) 31863貫÷43　　(ニ) 3636.6尺÷87尺

(ホ) 367.92斤÷36　　(ヘ) 100.8坪÷70坪

(5) 金拾六圓貳拾錢にて玄米を買入れ、四拾錢の精げ賃と拾八錢の運搬賃とを拂へば、原價何程に當るか。

〔解〕16圓20錢にて玄米を買入れ、40錢の精げ賃と18錢の運搬賃とを拂ふから、此の原價は、1620錢＋40錢＋18錢＝1678錢、即ち、16圓78錢に當る。

上の解を略して次の如くす。

1620錢＋40錢＋18錢＝1678錢　買入れし原價

答　16圓78錢

(6) 甲乙丙三生徒の體重を測りしに、甲は十二貫三百匁にして、乙は甲より八百匁重く、丙は乙より五百六十匁輕しといふ。乙丙の重さ如何。

〔解〕　12.3貫＋0.8貫＝13.1貫　乙の重さ

13.1貫－0.56貫＝12.54貫　丙の重さ

答 { 乙　13貫100匁
　 { 丙　12貫540匁

(7) 鉛筆一打の價が貳拾貳錢なるときは、十五打の價如何。

〔解〕　22錢×15＝330錢　所要の價

答　3圓30錢

(8) 百二十個入にて一箱貳圓五拾五錢の林檎一個の代は

◎一打は十二本のことなり。

何程に當るか。但し箱代は拾五錢に當る。

〔解〕　255錢－15錢＝240錢　120個の代價

240錢÷120＝2錢　所要の代價

答　2錢

第六章

(1)　次式の計算をなせ。

(イ)　1－0.0084＋2.536－0.036－0.421－0.3

(ロ)　547.77÷9.3－(26＋3.45)×2

(ハ)　42385×9－1

(ニ)　1738×4×1.5÷6＋2.62－20

(2)　次式の結果を求めよ。

(イ)　1375×3÷15－(1.39×21＋37×83)÷1198

(ロ)　(11.16÷2.4)÷9.3÷15)－0.24÷0.032

(ハ)　(1.6÷2.5)÷(1.6×0.4)－(12.5－62.5÷5)

(ニ)　534－{(3146－132×13)÷65＋49×8}

(3)　或文具店に於て、その所有の鉛筆七十五打の中、三十八打を賣り、後四十三打を買入れたりといふ。現在の所有の打數何程なるか。

(4)　一生徒あり。金拾貳錢五厘にて墨を買ひ、六錢八厘にて紙を買ひ、五錢五厘にて筆を買ひ、六錢にて鉛筆を買ひ、壹圓札にて支拂ひをなせりといふ。この釣錢如何。

(5)　或人六十里の道を始め若干里行き、それより十二里進、みしに、丁度中央の所に達せりといふ。この人、始め行きし里數は何程なるか。

(6)　甲軍艦の長さは約二百二十尺、乙軍艦はこれより八十

尺長く、丙軍艦は更に乙軍艦より百尺長し、乙丙二艦の長さは各々何尺なるか。

(7) 或汽船の速力は二十三「ノット」なりといふ。この汽船が一晝夜航行すれば何程進むか。

(8) 甲乙二人が同時に同所を出發して、反對の方向に進むに、毎時甲は一里半、乙は一里なりといふ。然らば、この二人が出發してより三時の後相離るゝ距離如何。八時間の後には如何。

(9) 舟夫あり。一河を遡るに、毎時十五町を上ぼれりといふ今この水流を二十八町とすれば、この人の平水を漕ぐときの毎時の速さ如何。また、下るときの毎時の速さ如何。

(10) 玄米二十九俵を金百五拾貳圓貳拾五錢にて買入れ、一俵につき、運賃參錢づゝを拂ひ、また、搗賃總計參圓六拾八錢を拂ひ、之を白米にせしに一俵を減ぜりといふ。白米一俵の代金を何程にせば損益なきか。

◎十五「ノット」止の船とは毎時十五浬進むことなり

第七章

(1) 八千八百二十四に何程を加ふれば、一萬五千となるか。

(2) 密柑九千六百五十二個を百二十個入りの箱につむれば幾箱を要するか。又殘りは何個あるか。

(3) 或數の六倍に八倍とは、或數の何程となるか。

(4) 某數の八倍より某數の三倍を引けば某數の何倍となるか。

(5) 加賀の白山は、その高さ八千九百四十七尺、駿河の富士山は白山より高きこと三千四百二十三尺。又、臺灣の新高山は富士山より四百八十尺高し。富士山と新高山の高さは何尺なるか。

(6) 或人金貳圓八拾錢を所持し、買物のために壹圓六拾五錢を費し、その後に貳圓參拾錢を貰ひ、貳圓八拾錢の買物をなせしといふ。現在の所持金如何。

(7) 一反拾五圓六拾錢の縮緬一匹の價何程なるか。又二十四匹の價は如何。

◎一匹とは二反のことなり

(8) 石油一升の價貳拾錢なるとき、毎夜二合五勺づゝを消費する家にては、三十日間に何程の石油代を要するか。

(9) 井戸の深さを測らんとし一七・五尺の繩を下したるに届かず一五・八尺のものを足したるに五・七尺餘れりといふ。然らば、この井戸の深さ如何。

(10) 酒 270.42 石を一樽二斗六升入に詰むれば幾樽を要するか。又一樽未滿のはしたは、何程にして一樽には何程不足なるか。

◎次の數を小數四位まで取りて以下を四捨五入せよ

(1) 56.84723 = 56.8472 弱
(2) 6.742321 = 6.7423 弱
(3) 7.536452 = 7.5365 弱
(4) 8.24857 = 8.2486 弱
(5) 0.002032 = 0.0020 弱
(6) 0.548961 = 0.5490 弱

◎小數四位まで取るとき四桁目が〇なるときも〇は省くべからず。

第八章

(1) 四捨五入につき知る所を語れ。

〔解〕四捨五入とは、或數を或桁限り取りて、その以下を省くとき、省かれたる部分の首の桁が四なるか或は四より小なるときは、單にこれを切り捨て、若し五或は五よりも大なる數なるときは、繰り上げて省かれざる部分の終りの桁に一を加ふる方法なり。例へば、42.7535541 に於て、小數四桁まで取りて其以下を四捨五入せんに、省かれたる部分の首の桁が四なるを以て、單に 42.7535 小數三桁限り取りて、其以下を四捨五入せんに、省かれたる部分の首の桁が五なるを以て、繰り上げて、42.754 となす。

而して、切り捨てられたる數の終には强或は餘といふ言葉を添へ、繰り上げたる部分の終りには弱といふ言葉を添ふるものとす。

(2) 次の商を四捨五入によりて、小數第三位まで求めよ。

(イ) 2768 ÷ 9 = ?　　(ロ) 96.848 ÷ 143 = ?

(3) 次の計算をなせ。

(イ) 16.0176÷21.3＝　(ロ) 0.01623÷0.028＝

(ハ) 9.85×74000＝　(ニ) 6.57×?＝5104.89

(ホ) 210×97×6＝　(ヘ) 3.1416×?×15＝376.992

(4) 幾何なる數を二百五十三除すれば、三百七十八となるか。

(5) 2049840 を幾何なる數にて除すれば、その商が 234 となるか。

(6) 一ケ月に三十五枚づゝの紙を費さば、七百枚を費すには、何ケ月かゝるか。

(7) 壹圓にて八帖の美濃紙は五圓にて何帖買ひ得るか。又參圓五拾錢にては如何。六拾貳錢五厘にては如何。

(8) 一反五圓六拾錢の紬三十四反と、一反九圓七拾四錢の絹二十一反とを買ひ、金壹百六拾圓だけ支拂へりといふ。尙何程支拂ふべきか。

(9) 二八・五升にて四圓貳拾七錢五厘の米一升の價如何。

(10) 或學校の學級數は十二にして、一學級の生徒の數は平均三十八人なるときは、生徒の總數如何。

第九章

(1) 次の計算をなせ。

(イ) 17.745÷3.07＋1365×0.025−26.4928

(ロ) (7.5764＋2.4236)×5−69.174÷25.62

(ハ) 72.54×4÷0.9×7＋5.821−6.0019

(2) 鉛筆五百本を若干人に分與せんとするに、一人に付三十本づゝとすれば、四十本不足すといふ。その人員幾何な

るか。

(3) 三十五里を二時間に駛る瀛車は五時間半には、何程駛るか。

(4) 間口十間、奥行二十四間の宅地あり。この周圍に板圍をなすに、一間につき壹圓四拾五錢かゝるといふ。この總費用は何程なるか。

〔解〕 (10間＋24間)×2＝68間　宅地の周圍
145錢×68＝9860錢　所要の費用
答 98圓60錢

◎間口とは宅地が道路に沿ふ方をいひ、否らざるものを奥行といふ。

(5) 縦八寸、横六寸の長方形の紙片の面積は幾平方寸あるか。

(6) 矩形の地面あり。縦は十八間にして、横は九間半なりといふ。その面積を求めよ。

◎長方形は矩形ともいひ、縦を表はす數と横を表はす數との積に面積の單位の名を附するものとす。

(7) 長方形の紙片の面積が五十六平方寸にして、縦が八寸なりといふ。横は幾寸なるか。

(8) 正方形の宅地の一邊の長さが五間あるときは、その面積は幾坪あるか。

◎正方形の面積を求めんには、その邊の長さを二乘して單位の名を附すべし。

(9) 五平方尺と五尺平方との區別を問ふ。

〔解〕 五平方尺とは一平方尺のものが五つ集まりたるものにして、五尺平方とは、一邊の長さが五尺なる正方形のことにして、(5×5)平方尺＝25平方尺に等し。

(10) 長さ四尺、幅六尺の矩形と五尺平方の正方形とは何れが何程大なるか。

第十章

(1) 底邊六尺、高さ四尺の三角形の面積は何程あるか。

(2) 次の計算をなせ。

◎三角形の底面は底邊と高さとの積の半分に等し。
底邊×高＋2

(イ) 18.07石×24　(ロ) 3.1416尺×500
(ハ) 2087圓×5.07　(ニ) 59.8斤×44.5

(3) 一本參錢七厘の鉛筆一打の價は何程なるか。また二十七打の價如何。

(4) 底邊三尺、高さ八尺の平行四邊形の地面の面積は幾平方尺あるか。

◎平行四邊形の面積は底邊と高との積に等し

(5) 或數の五倍半が六十六ならば、或數とは何程のことなるか。

(6) 車の輪の直徑が四尺五寸あるときは、輪の周圍は何程あるか。

◎周圍は直徑に3.1416を掛けたるものに等し

(7) 一回轉にて69.1152尺進む車の直徑は何程あるか。

◎圓の半徑は直徑の半分に等し

(8) 半徑五寸の桶の周りは何程あるか。又七寸のものゝ圍りは何程あるか。

(9) 大工あり。一日の賃錢金八拾五錢にして、若干日働きて、金拾八圓七拾錢を得たりといふ。働きし日數如何。

(10) 二斗八升五合が四圓貳拾七錢五厘なる米五升五合の價は何程なるか。

第十一章

(1) 次の結果を求めよ。

(イ) 0.472÷0.04　(ロ) 0.02254÷0.92
(ハ) 1.2126圓÷2.58　(ニ) 2.0776石÷0.28石

(2) 一斗の價四圓の酒と、一斗二升五合の價六圓貳拾五錢の酒とは、壹圓につき各々何升に當るか。

(3) 甲乙二人が、同時に同方向に同所を出發せり。毎日、甲は十一里、乙は八里半づゝ歩むといふ。然らば十八日間歩行

を續けば、乙は甲より何程後れゐるか。

(4) 上の問題に於て同時に反對の方向に出發せば、甲と乙、この距離は何程なるか。

(5) 縱五間、横三間の室には疊何枚を敷き得べきか。

(6) 二十四疊敷きの座敷の縱が三間なるときは、横は何間あるか。

◎一坪には疊二枚を敷き得。

(7) 水一升の目方は、約四百八十匁なり。然らば、水一斗六升七合の目方は何程であるか。

(8) 水一升の目方は約四百八十匁にして、海水一升の目方は、水の目方の一〇二六倍なりといふ。然らば、海水七升五合の目方如何。

(9) 讀本一冊と算術書一冊との價合せて參拾錢にして、讀本は算術書より六錢高しといふ。各一冊の價如何。

(10) 金百參拾八圓を甲乙丙の三人に分ち與ふるに、甲は乙よりも五圓多く、乙は丙よりも八圓多く與へたりといふ各々の取り前は、何程なるか。

第十二章

(1) 鯨尺の八尺は、常尺(曲尺)の何尺に當るか。

(2) 鯨尺にて五丈六尺の反物は常尺にて何程あるか。

(3) 常尺の十二尺は鯨尺の何程に當るか。

(4) 常尺の三丈四尺は鯨尺にて示せば何程あるか。

(5) 上底四寸、下底八寸、高さ六寸の梯形ありその面積如何。

(6) 對角線の長さが各々六寸、九寸なる菱形の紙片の面積を求めよ。

(7) 六男八女ともに働きて、合計十圓の賃錢を得たり。各一人の賃錢は何程なるか。但し、男一人の賃錢は、女一人の賃

◎鯨尺の一尺は常尺の二寸五分に當り、常尺の一尺は鯨尺の一八尺。

◎梯形の面積は上底と下底との和の半分に高さを乘ずべし。

$$\left(\frac{上底+下底}{2}\right)\times高さ$$

◎菱形の面積は各對角線の積の半分に等しい。

$$\frac{對角線\times對角線}{2}$$

◎一週間は七日のことなり。

◎圓の面積は半徑の二乘に三・一四一六を乘じたるものに等し。
(半徑)×(半徑)×3.1416

錢の二倍なり。

(8) 二百五十八里を隔つる兩府より甲乙二人同時に相向つて出發し、毎日甲は十二里、乙は九里半を行くとせば、一週間の後二人の相距ること幾里なるか。又幾日にして相出會ふか。

(9) 甲乙二人の脚夫あり。毎時甲は三十五町、乙は二十八町進むといふ。今乙が出發してより二時の後甲が乙を追ふときは何時間にして追付くべきか。

第十三章

(1) 直徑二尺の圓の面積を求めよ。

(2) 一丈八尺四寸の絹糸を二つに切り、長き方を短き方よりも二尺六寸だけ長くせんには、各幾何づゝにすればよきか。

◎直方体の体積は、縦と横と高さとの積を求むればよし。
縦×横×高

(3) 或人一石拾貳圓の米百二十八石を賣り拂ひ、その代價にて、一石八圓の麥を買入れしといふ。買ひ入れし麥の石數を求めよ。

(4) 縦九寸、横八寸、高さ四寸なる直方体の体積は幾立方寸あるか。又幾立方分あるか。

(5) 一個貳錢八厘の鷄卵を毎日四個づゝ食すると、一合四錢五厘の牛乳を毎日一・八合づゝ飲むとは、一ケ年(三百六十五日)には費用の差如何。

(6) 縦十二間、横十五間の矩形の地面に半徑三間の圓形の池を堀るときは、殘りの面積は何程あるか。

(7) 五立方尺と五尺立方との區別を問ふ。

(8) 体積二百八十八立方寸、長さ八寸、横九寸なる直方体の高さは幾寸あるか。

◎立方体の体積はその稜の長さの三乘を求むればよし。
積＝稜×稜×稜

◎角柱及び圓柱の体積は底面積に高さを乘ずべし。側面積を求めんには底面の周に高さを乘ずべし

(9) 或數は六十五の十二倍に當るといふ。その數を求めよ。

(10) 兒童三人の体重を測りしに、甲は七・三二貫、乙は八・四一貫、丙は九・二三貫ありしといふ。平均一人の体重を求めよ。

第十四章

(1) 一邊の長さ四尺五寸の立方体の石あり。その体積は幾立方寸あるか。又幾立方尺あるか。

(2) 次の結果を求めよ。

(イ) $29.67+(33.42+30+4.82)$

(ロ) $\{(7.5+2.05)\times0.06+2+2.5\}\times85$

(3) 五角柱の底面積が八平方寸にして、高さが九寸ある木片の体積を求めよ。

(4) 底面の半徑は三尺にして、高さ六寸の圓柱の側面積、全面積及体積如何。

◎錐体の体積は底面に高さを掛け三除すべし

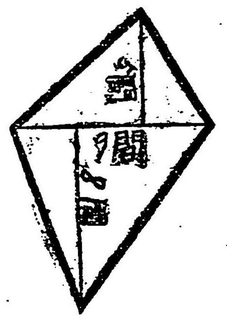
◎球の体積は半徑を表す數の三乘に3.1416の四倍を掛けて三除すべし。

◎一升の体積は64827立方分に等し。

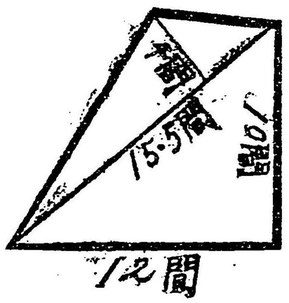
(5) 底面の半徑六寸、高さ五寸の圓錐体の体積を求めよ。

(6) 次の如き四邊形の面積を求めよ。

(イ)



(ロ)



(7) 半徑五尺の球の體積は幾立方尺あるか。また、幾立方寸あるか。

(8) 次の掛け算の運算の□と●と△とを求めよ。

```
  △6
 ×87
 686
7●4
8□26
```

(9) 内法、縦九・八寸、横一四・七寸、高さ一三・五寸の箱には何斗の米を入れ得べきか。